

「原子カムラ」の境界を超えるためのコミュニケーション

(文中 敬称略)

座長：木村 浩（パブリックアウトリーチ）

このセッションは、3 件の講演の後、会場との質疑応答を設ける。

この研究は、平成 24 年度・25 年度の原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブ『「原子カムラ」の境界を超えるためのコミュニケーション・フィールドの試行』（文科省より受託）にて実施している。

まず、3 件の講演のコンセプトを紹介したい。福島第一原子力発電所の事故後、「原子カムラ」という言葉がたびたび聞かれるようになったことが背景にある。必ずしも全市民がこの言葉を知っているわけではないが、我々に「原子カムラ」という言葉がしばしば届くようになった。なぜ世間から「ムラ」と認識されているのかについて、二つの考え方がある。一つは、「ムラ」と呼ばれる人が集まって内向きの

凝集力となり、ムラを構成するという考え方。そして、どこまでが「原子カムラ」なのかについては必ずしも定義されているわけではないが、ムラの中と外にいる人との相互的なやり取りによって境界ができるという考え方。この研究では、必ずしも凝集力だけではなく、外から「原子カムラ」と呼ぶことで境界ができているという仮説を立てており、タイトルも「原子カムラを超えるため」とか「原子カムラを解消するためのコミュニケーション」とはしていない。中の人と外の人との相互作用で何かしらの「原子カムラの境界」があり、それをどう越えていくのか、について研究を進めている。

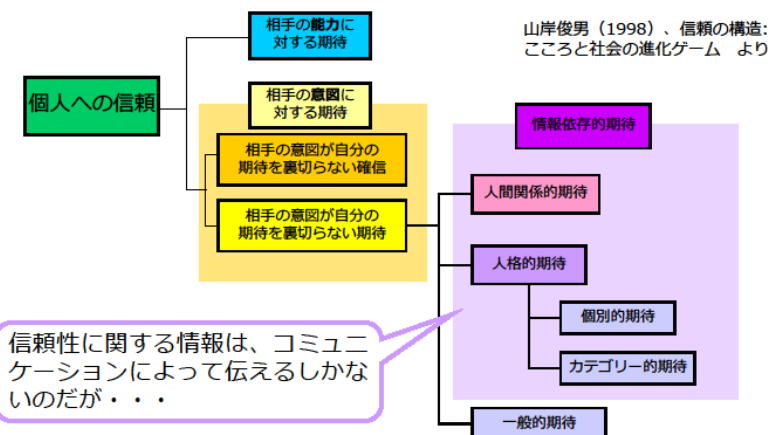
それではなぜ、ムラそのものではなく境界に注目したのか。現在、原子力は社会からの信頼を大きく失っている状況だ。この図は山岸氏が作った信頼のモデルだが、この中でよく問題にされるのは、「能力に対する期待」「意図に対する期待」

本セッションの射程

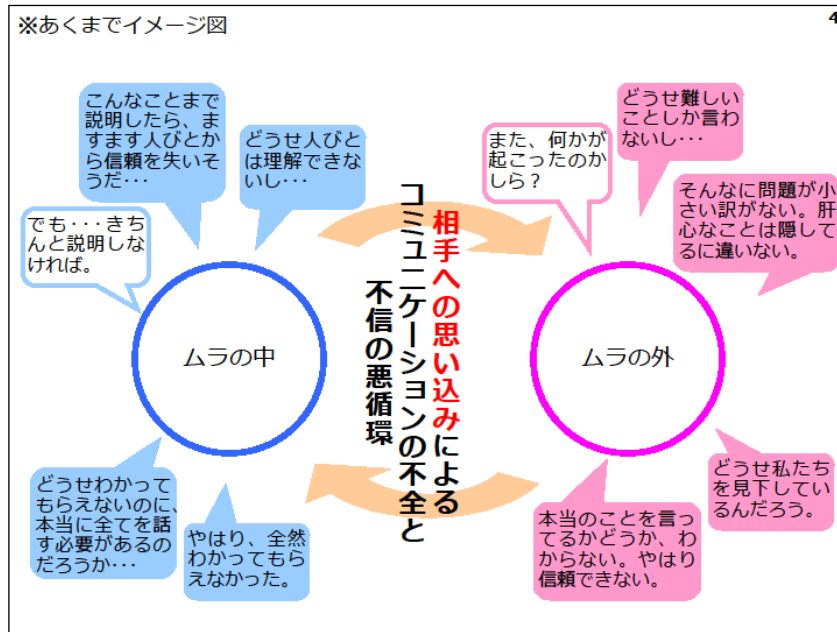
- 福島第一原子力発電所の事故後、「原子カムラ」という言葉が、たびたび聞かれるようになった。
 - － 現に社会から「原子カムラ」と呼ばれているのは事実である
- なぜ世間から「ムラ」と認識されるのか？
 - － 「ムラ」を形作るのは、ムラ内部の凝集力ばかりではないのではないか？
 - － すなわち、「ムラ内部」と「世間（Public, 集合としての市民）」との相互作用によって、その2者の間に境界が生じた（境界をお互いが作り上げた）状態と考えられる。
- ここで問題とするのは、「原子カムラ」そのものというよりは、「**原子カムラ**」の境界。

なぜ、境界に注目したのか？

- 現在、原子力は、社会からの**信頼**を大きく失っている。



であり、信頼は能力と意図によって評価される。この中でもう一つ、私が重要だと思っているのは、「情報依存的期待」のモデルだ。信頼を判断する要素を人がどのように獲得するのかは、情報に依存することを示している。この中には、直接のコミュニケーションによって決定される「人間関係的期待」、誰かやマスメディアがこのように言っていたとか、所属（カテゴリー）から推定されるとか、伝聞による情報の伝達で信頼は考えられている。原子力と漠然と書いたが、原子力全体として信頼を失っている状況では、恐らく、情報依存的の中でも特に伝聞による情報は非常に使いにくく、信じてもらえない。情報はコミュニケーションによって伝えるしかないが、実は信頼性を伝える情報も信頼されないというのが現状だと予想される。



これはイメージ図だが、ムラの中と外があるとして、中の方は「こんなことまで説明したら、ますます信頼を失いそう」「どうせ外の人々は理解できない」と思いながらも説明し、外の方は「中の方はどうせ難しいことしか言わない」「肝心のことは隠しているのでは」「見下しているのだろう」と考え、ある意味ここに、お互いの思い込みによるコミュニケーション

の不全と不信の悪循環が存在しているのではないかと、と思われる。今日は、これをどう打破すればいいのかについて、お話ししたい。

お互いの何らかの思いこみにより、お互いのギャップが広がった結果、コミュニケーションの不全と不信の悪循環を招いているのではないかと。「原子力ムラ」という言葉は、相手への思い込みを顕著に表しており、そういうイメージを相手に植え付ける言葉として機能しているかもしれない。このギャップを「原子力ムラの境界」と表現して、今日は話を進めたい。そのために何をするか。まずはお互いの思い込みそのもの、もしくは「原子力ムラ」がどういうモノとして扱われているか、ムラの中と外があるとすれば、ギャップにはどういうモノがあるかを明らかにしたい。そしてこれをどう乗り越えていくのかを示したい。

「原子力ムラ」の境界とは？

- お互いが何らかの思い込みをして、お互いのギャップが広がった結果、コミュニケーションの不全と不信の悪循環を招いているのではないかと。
 - 「原子力ムラ」という言葉は、相手への思い込みを顕著に表している言葉かもしれない。
- ↓
- お互いの思い込みによるギャップを「原子力ムラ」の境界と表現することとした。
- ↓
- まず、この思い込みそのものはどんなものを明らかにしなければならない。
 - そして、これをどう乗り越えていくかを示す必要がある。

1. 福島第一原子力発電所事故と「原子カムラ」

竹中一真（東京大学）

ここでは、そもそも「原子カムラ」とは、世間からどう認識されているのかを考えていく。ここで認識のされ方を考える上で、難しいポイントの一つ目は、「原子カムラ」の定義がはっきりしていないこと。そのため、一人一人が持つイメージが異なり、また非常にぼんやりとしている。これをどう抽出・分析するかが難しい。二つ目は、原子力界と一般市民が直接交流する機会ほとんどなく、一般市民が持つ「原子カムラ」へのイメージのほとんどはメディアが出した情報によるものであるということ。そこで、メディアがどのように情報を出しているのかを考えることにより、一般市民が「原子カムラ」という言葉を聞いたときに、どのような認識をするかを考えることに繋がるので、ここでは新聞記事を元にそれを見ていく。

研究の背景

□そもそも「原子カムラ」とは、世間からどう認識されているのか？

- 「原子カムラ」の定義がハッキリしていない。そのため、一人ひとりが持つイメージが異なり、またイメージも非常にぼんやりとしている。
- 原子力界と一般市民が直接交流する機会ほとんどない。そのため、一般市民が持つ「原子カムラ」へのイメージのほとんどはメディアが出した情報によるものである。
- 一般市民が「原子カムラ」という言葉を聞いた時にどのような認識をしているか、新聞記事を元に分析する。



研究の目的

□新聞記事を元に、一般市民が「原子カムラ」という言葉を聞いた時にどのような認識をしているか分析する。

新聞に見られる「原子カムラ」とは

- どのような集団に対して使われている言葉なのか
 - どのような特徴を持つとして記述されているのか
- ということを明らかにする。

今回は、新聞に見られる「原子カムラ」はどのような集団に対して使われている言葉なのか、また、どのような特徴を持つとして記述されていくのかに着目した。

本調査では、発行部数1位と2位の読売新聞と朝日新聞において、「原子カムラ」という言葉が使われている2012年度末までの全ての記事を対象とした。図1のグラフは、「原子カムラ」という言葉の年度別の使用回数を示

す。2011年度、つまり福島第一原子力発電所の事故以降、その回数が飛躍的に伸びている。一方、数は少ないが、事故以前も「原子カムラ」という言葉は使われていた。

事故以前は、原子力発電所が立地された自治体の村、または電力会社の原子力部門を指す言葉として、定義が明確な状態で使われていた。一方、事故後は、定義

調査範囲

- 発行部数1位、2位の読売新聞、朝日新聞を対象。
- 読売新聞、朝日新聞それぞれのオンライン記事データベースである「ヨミダス歴史館」、「聞蔵Ⅱビジュアル」を使用。
- 「原子カムラ」または「原子力村」という言葉が使われている記事。
- 2012年12月31日までの全ての記事。

※以後、「原子カムラ」と「原子力村」を合わせて「原子カムラ」と記述する。

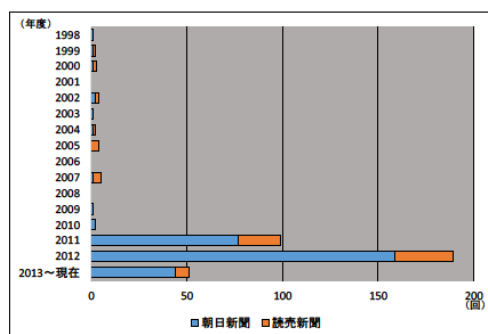


図1. 読売新聞および朝日新聞の「原子カムラ」と「原子力村」の年度別合計使用回数

分析対象の設定

福島事故以前の「原子カムラ」

- 「原子力村」とする記述が主。
- 原発が立地された自治体の村、または、電力会社の原子力部門を指す言葉として用いられている。

福島事故以後の「原子カムラ」

- 何を指す言葉として使われているのかあいまい。
 - 例えば、「原子力における産官学の利益共同体」という定義^[2]があるが、全ての記事にこの定義があてはまるわけではない。

分析対象の設定

- 本研究では、福島事故以後に新聞記事に見られる、定義があいまいな「原子カムラ」を分析対象とする。

[2] 飯田哲也(1997.2)「論座」,朝日新聞社。⁵

がはっきりしておらず、何を指す言葉なのかよく分からない状況だ。そこで、本研究では、福島事故以後の新聞記事中の「原子カムラ」を分析した。

分析にあたっては、「どのような集団に対して使われている言葉なのか」「どのような特徴を持つとして記述されているのか」について、グループダイナミックスの考え方をを用いた。

新聞に見られる「原子カムラ」の分析

新聞に見られる「原子カムラ」の分析を

- どのような集団に対して使われている言葉なのか
 - どのような特徴を持つとして記述されているのか
- の2点についてグループダイナミックスの観点から行う。

※グループダイナミックス

集団の特質、集団発達の法則あるいは集団内や集団間に働く様々な力の作用・動態を分析しようとする研究分野

どのような集団に対して使われている言葉なのか

グループダイナミックス研究において「集団」を定義する上で

- 複数の構成員がおり、
 - 構成員が共通の目的をもっている
- ことが前提条件として捉えられている。

そこで、分析の準備として、

- 集団の目的に着目し、新聞の中で「原子カムラ」の目的が明確に示されているものを取り出し、分類する。
- そして、分類ごとに構成員として記述される組織を示す。

7

どのような集団に対して使われている言葉なのか

グループダイナミックス研究において

- 複数の構成員がおり、
 - 構成員が共通の目的をもっている
- ことが前提条件として捉えられている。

そこで、分析の準備として、

- 集団の目的に着目し、新聞の中で「原子カムラ」の目的が明確に示されているものを取り出し、分類する。
- そして、分類ごとに構成員として記述される組織を示す。

新聞では、どのような構成員が「原子カムラ」にいるのか、の分析が難しい。

8

ではまず、どのような集団に対して使われている言葉なのか。グループダイナミックス研究において「集団」を定義する時には、複数の構成員がいることと、構成員が共通の目的を持っていることが前提条件となる。この条件を使って考えていきたいのだが、「複数の構成員がいること」の条件で分類しようとする、新聞ではどのような構成員が「原子カムラ」にいるのかの分析が難しい。ある組織が原子カムラの一員だという書き方はしても、それ以外にどういう組織がいるのかについては、はっきり書いていないからだ。よって今回は「構成員が共通の目的をもってい

る」という条件に着目し、原子力ムラがどのような目的を持っているのかに沿って分類した。

新聞に見られる「推進集団」と「利権集団」

	推進集団(N=26)	利権集団(N=17)
目的	原子力を推進すること	利権を得ること
中心とされる 構成員	電力会社 官僚 専門家 メーカー 産業界	電力会社 官僚 専門家
それ以外の 構成員	政治家 規制組織	メーカー 産業界 政治家 メディア

9

り込まれたとする記事が多い。一方で利権集団については、利権の中心は電力会社で、その非常に近い位置に官僚や専門家がいます。利権に群がっていったのがメーカー、産業界、政治家。メディアは金で取り込まれたとある。

「推進集団」と「利権集団」の特徴分析

「推進集団」と「利権集団」の特徴分析を行うために、以下のステップを経る。

1. **特徴を分類するための軸を作成する。**
➤「集団の要件」、「集団一般の特徴」、「集団思考の特徴」
2. 新聞に見られる「原子力ムラ」の特徴を軸により分類する。
3. 「推進集団」、「利権集団」それぞれが持つ特徴の分析、比較をする。
4. 3. の分析結果よりわかることの考察、まとめ。

では第1の集団の一般的な要件だが、ドイツ氏の研究によれば、集団には擬似集団、機能する集団、組織化された集団の3種類ある。擬似集団の特徴は、複数の構成員がいることと、相互依存性があること。機能する集団は、擬似集団の特徴に加えて相互作用を持つ。組織化された集団については、機能する集団に加えて役割分化と規範が見られる。そして集団一般が持つ特徴として、集団への愛着、仲間意識、中と外の区別

その結果がこれだ。記事にある原子力ムラの目的には大きく二つある。一つは「原子力を推進すること」。もう一つは「原子力使って利権を得ること」。今回はこれらを「推進集団」と「利権集団」と呼ぶ。推進集団であるムラの中心的住人は電力会社、官僚、専門家、メーカー、産業界で、その他に政治家や規制組織がいた。政治家については取り込まれたとされる記事と、自分からムラの中に入っていったとする記事の二つがある。規制組織については取

推進集団と利権集団のそれぞれの特徴分析を行うにあたり、4つのステップを踏む。第1は集団が一般的に持つ特徴は何か。第2で「原子力ムラ」の特徴と一般的な集団の特徴の違いを抽出。第3で推進集団および利権集団の特徴にどんな違いがあるか。最後は第3の結果から分かることをまとめる。

集団の要件

- Deutschによる「集団」の定義[3]を用いる。

➤ その中で集団の分類において用いた「複数の構成員」がいること、「集団の目的」を持つこと、の2つの要件は評価軸からはずしている。

	特徴(評価軸)	特徴の内容
擬似集団	(a)相互依存性	各々の構成員が相互依存性を意識している。
機能する集団	(b)相互作用	構成員間で相互作用がなされ、更に共有された目標を追及している。
組織化された集団	(c)役割分化	集団の目的を達成するため構成員間で役割が形成されている。
	(d)規範	構成員の行動や態度に対し共有された標準的な枠組みがある。

[3] Deutsch, M. (1973) 「The Resolution of Conflict」 Yale University Press.

11

化、制裁、同調行動、集団圧力の 6 つがある。

集団一般の特徴

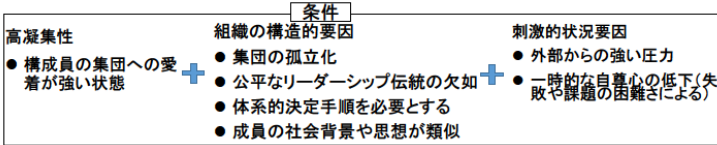
- 蜂屋・狩野[4]による集団が一般的に持つ特徴を用いる。ただし、これらの特徴は程度が弱い場合がある。
 - なお、蜂屋・狩野が示す特徴の中で、「集団の要件」に含まれるものは「集団一般の特徴」からは除いている。

特徴(評価軸)	特徴の内容
(e)集団への愛着	構成員がその集団に所属していることに魅力を感じており、集団にとどまろうとする気持ちがある。
(f)仲間意識	構成員間で仲間意識が存在する。
(g)中と外の区別化	構成員以外の人々と自分たちを区別するような気持ちがある。
(h)制裁	集団が持つ標準的な枠組み・規範からの逸脱者に対する間接的、もしくは直接的な罰がある。
(i)同調行動	集団が持つ基準や標準、価値観や期待にそっての行動をする。
(j)集団圧力	集団の多数が支持する意見や行動に対し、同調を迫る明示的、もしくは非明示的な圧力がある。

〔4〕蜂屋良彦ら(1987)「集団行動の心理学」、佐々木薫ら編、有斐閣。 12

集団思考の特徴

- Janisによる集団思考モデル[5]を用いる。



特徴(評価軸)	特徴の内容
(j')集団圧力	全会一致の幻想を感じ、また、反対者に対する直接的圧力・マインドガードの出現がみられる。
(k)集団外への紋切り型判断	集団外に対して紋切り型判断がおこなわれる。
(l)集団内での過信、理屈づけ	不敗神話や集団固有の特性に対する確信的信念、あるいは、集団内での理屈づけがある。

〔5〕 Janis, I. L. (1972) 「Victims of Groupthink」Houghton Mifflin.

13

そしてもう一つの特徴分析として集団思考モデルを参考にした。ここにある条件が整ったとき、下表のような特徴が生じてしまうというモデルだ。条件には、凝集性に加えて組織の構造的な問題（孤立化やリーダーシップの欠如）と、さらに外部からの力があり、これら 3 つが揃ったとき、集団圧力、集団外への紋切型判断、集団内での過信・理屈付けが強まるという特徴がみられるようになる。

評価軸に基づいた特徴の分類

評価軸	特徴を示すと思われる言葉の例	
	推進集団	利権集団
要件	(a)相互依存性 (b)相互作用 (c)役割分化 (d)規範	なれ合い 癒着、談合体質 「推進側」と「規制側」が同居する 共同体、なれ合い 寄付、癒着、天下り
集団一般の特徴	(e)集団への愛着 (f)仲間意識 (g)中と外の区別化 (h)制裁 (i)同調行動 (j)集団圧力	(集団の)心地よさ 仲間、同質の意見を持つ集団、強固 閉鎖性、外部とのコミュニケーション不足、内向き 閉鎖性、(反対する外部への)圧力、専門性 仲間外れにするメカニズム 空気には抗えない、原発批判ができない
集団思考の特徴	(j')集団圧力 (k)集団外への紋切り型判断 (l)集団内での過信、理屈づけ その他	批判を許さない、反対意見を受け付けない 安全神話、原発が安全だと過信、など 反省しない、無責任など 非民主的、独走

次に、この一般的な集団と原子カムの違いを見ていく。分類にあたり、この「村八分」という言葉に注目すると、記事にも「原子カムには村八分が存在する」というものがあつた。「村八分」という言葉は先ほどの特徴のどれに当てはまるのかを考え、「制裁」に

評価軸に基づいた特徴の分類

評価軸	特徴を示すと思われる言葉の例	
	推進集団	利権集団
要件	(a)相互依存性 (b)相互作用 (c)役割分化 (d)規範	なれ合い 癒着、談合体質 「推進側」と「規制側」が同居する 共同体、なれ合い 寄付、癒着、天下り
集団一般の特徴	(e)集団への愛着 (f)仲間意識 (g)中と外の区別化 (h)制裁 (i)同調行動 (j)集団圧力	(集団の)心地よさ 仲間、同質の意見を持つ集団、強固 閉鎖性、外部とのコミュニケーション不足、内向き 閉鎖性、(反対する外部への)圧力、専門性 仲間外れにするメカニズム 空気には抗えない、原発批判ができない
集団思考の特徴	(j')集団圧力 (k)集団外への紋切り型判断 (l)集団内での過信、理屈づけ その他	批判を許さない、反対意見を受け付けない 安全神話、原発が安全だと過信、など 反省しない、無責任など 非民主的、独走

新聞記事
「原子カムには村八分が見られる。」

当てはまる、と分類した結果が次の表になる。さきほどの特徴に当てはまらない項目は「その他」に分類した。

この分類の結果より、新聞で描かれる「推進集団」と「利権集団」の特徴は次のそれぞれの表のとおりである。

新聞で描かれる「推進集団」の特徴

目的	原子力発電を推進するという目的を持つ。
(a)相互依存性	なれ合いが見られる。
(b)相互作用	談合や癒着といった相互作用が見られる。
(c)役割分化	規制側の組織を取り込んでいる。
(e)集団への愛着	構成員は集団にすることに心地よさを感じる。
(f)仲間意識	構成員は皆同じような意見を持っており、構成員同士で強固に団結している。
(g)中と外の区別化	集団外に対しては閉鎖的で交流が少ない。
(h)制裁	村八分がある。
(i)同調行動	構成員は自分の論理で考えず、無批判に同調している。
(j')集団圧力	構成員が「原子カム」に対し何らかの批判や反対意見を言うことは許されない。
(l)集団内での過信、理屈づけ	「原子カム」が原子力の安全神話をつくってきた。
その他	福島事故に対する反省がなく、無責任である。これらの姿は総じて非民主的な集団のように見える。

新聞で描かれる「利権集団」の特徴

	「原子カム」では利権を得ることを目的とした人や組織が集まり、更なる原子力利権を得ようと追求している
相互依存性	なれ合いが見られ、共同体になっている。
相互作用	癒着が見られる。
中と外の区別化	集団外に対しては閉鎖的である。また、反対する人や組織に対しては圧力をかけたり、取り込んだりする巨大な力を持っている。
(h)制裁	批判するものを仲間はずれにするメカニズムがある。
(j)集団圧力	集団内には原子力の批判ができないような空気がある。
(l)集団内での過信、理屈づけ	「原子カム」が原子力の安全神話をつくってきた。
その他	福島事故に対しては、責任の所在が分散しており、誰もが自分の責任だと思っていない。これらの姿は総じて独善的に見える。

では、この「推進集団」と「利権集団」の違いは何か。

「推進集団」と「利権集団」に見られる特徴の違い

	評価軸	特徴を示すと思われる言葉の例	
		推進集団	利権集団
要件 集団の	(a)相互依存性	なれ合い	共同体、なれ合い
	(b)相互作用	癒着、談合体質	寄付、癒着、天下り
	(c)役割分化	「推進側」と「規制側」が同居する	
	(d)規範		
集団一般の特徴	(e)集団への愛着	(集団の)心地よさ	
	(f)仲間意識	仲間、同質の意見を持つ集団、強固	
	(g)中と外の区別化	閉鎖性、外部とのコミュニケーション不足、内向き	閉鎖性、(反対する外部への)圧力、専門性
	(h)制裁	村八分	仲間外れにするメカニズム
	(i)同調行動	無批判に同調、自分の論理で思考しない	
	(j)集団圧力		空気に抗えない、原発批判ができない
集団思考の特徴	(j')集団圧力	批判を許さない、反対意見を受け付けられない	
	(k)集団外への紋切り型判断		
	(l)集団内での過信、理屈づけ	安全神話、原発が安全だと過信、など	安全神話、原発の安全性を過信
	その他	反省しない、無責任など 非民主的、独走	(自分の)責任ではない 独善、今さらやめられない

まず相互依存性について、「推進集団」は安全性などに関する不利な情報を出さないようにするために相互に依存し、悪い言い方をすると癒着が見られると書かれている。一方「利権集団」は、補助金や天下りといった利権に関する相互依存があると書かれている。また役割分化の記事は推進集団に対してのみある。

「推進集団」と「利権集団」に見られる特徴の違い

	評価軸	特徴を示すと思われる言葉の例	
		推進集団	利権集団
要件 集団の	(a)相互依存性	なれ合い	共同体、なれ合い
	(b)相互作用	癒着、談合体質	寄付、癒着、天下り
	(c)役割分化	「推進側」と「規制側」が同居する	
	(d)規範		
集団一般の特徴	(e)集団への愛着	(集団の)心地よさ	
	(f)仲間意識	仲間、同質の意見を持つ集団、強固	
	(g)中と外の区別化	閉鎖性、外部とのコミュニケーション不足、内向き	閉鎖性、(反対する外部への)圧力、専門性
	(h)制裁	村八分	仲間外れにするメカニズム
	(i)同調行動	無批判に同調、自分の論理で思考しない	
	(j)集団圧力		空気に抗えない、原発批判ができない
集団思考の特徴	(j')集団圧力	批判を許さない、反対意見を受け付けられない	
	(k)集団外への紋切り型判断		
	(l)集団内での過信、理屈づけ	安全神話、原発が安全だと過信、など	安全神話、原発の安全性を過信
	その他	反省しない、無責任など 非民主的、独走	(自分の)責任ではない 独善、今さらやめられない

- 「推進集団」では安全性などに関する不利な情報を出さないようにするための相互依存・相互作用が記述されているのに対し、「利権集団」では、補助金や天下りなど利権に関する相互依存・相互作用が新聞で記述される。
- 「推進集団」にのみ役割分化の記事が見られる。

「推進集団」と「利権集団」に見られる特徴の違い

要件 集団の	(a)相互依存性	なれ合い	共同体、なれ合い
	(b)相互作用	癒着、談合体質	寄付、癒着、天下り
	(c)役割分化	「推進側」と「規制側」が同居する	
	(d)規範		
集団一般の特徴	(e)集団への愛着	(集団の)心地よさ	
	(f)仲間意識	仲間、同質の意見を持つ集団、強固	
	(g)中と外の区別化	閉鎖性、外部とのコミュニケーション不足、内向き	閉鎖性、(反対する外部への)圧力、専門性
	(h)制裁	村八分	仲間外れにするメカニズム
	(i)同調行動	無批判に同調、自分の論理で思考しない	
	(j)集団圧力		空気に抗えない、原発批判ができない
集団思考の特徴	(j')集団圧力	批判を許さない、反対意見を受け付けられない	
	(k)集団外への紋切り型判断		
	(l)集団内での過信、理屈づけ	安全神話、原発が安全だと過信、など	安全神話、原発の安全性を過信
	その他	反省しない、無責任など 非民主的、独走	(自分の)責任ではない 独善、今さらやめられない

- 新聞記事において「推進集団」では、集団への愛着、仲間意識が見られるのに対し、「利権集団」では見られない。
- 「推進集団」の方が「利権集団」より程度の強い集団圧力として記事では書かれている。また、同調圧力は「推進集団」にのみ記述がある。

次に新聞記事において、「推進集団」は集団への愛着や仲間意識が見られるのに対し、「利権集団」にはそういった特徴は描かれていない。また、「推進集団」の方が「利権集団」より程度の強い集団圧力が色濃く現れている。同調圧力は「推進集団」にのみ記述がある。

最後に責任について、「推進集団」に対しては「福島事故に関し反省がなく、無責任。責任を負うべき」と記述されているが、「利権集団」に対しては「福島事故に関し責任の所在が分散しており、誰もが自分の責任と思っていない。幅広く責任が広がっており、どこが一番責任を負うか、判断が難しい」と記述されている。

「推進集団」と「利権集団」に見られる特徴の違い

	評価軸	特徴を示すと思われる言葉の例	
		推進集団	利権集団
要件の	(a)相互依存性	なれ合い	共同体、なれ合い
	(b)相互作用	癒着、談合体質	寄付、癒着、天下り
	(c)役割分化	「推進側」と「規制側」が同居する	
	(d)規範		
集団一般の特徴	(e)集団への愛着	(集団の)心地よさ	
	(f)仲間意識	仲間、同質の意見を持つ集団、強固	
	(g)中と外の区別化	閉鎖性、外部との内向き	
	(h)制裁	村八分	
	(i)同調行動	無批判に同調、自己	
	(j)集団圧力	批判を許さない、い	
集団思考の特徴	(k)集団外への紋切り型判断		
	(l)集団内での過信、理屈づけ	安全神話、原発が安全だと過信、な	安全神話、原発の安全性を過信
	その他	反省しない、無責任など 非民主的、独走	(自分の)責任ではない 独善、今さらやめられない

- 「推進集団」に対しては、福島事故に関し、反省がなく、無責任であるとの記述がある。
- 「利権集団」に対しては、福島事故に関し、責任の所在が分散しており、誰もが自分の責任だと思っていないとの記述がある。

23

考察1. 集団としての段階

	特徴(評価軸)	推進集団	利権集団
擬似集団	(a)相互依存性	○	○
機能する集団	(b)相互作用	○	○
組織化された集団	(c)役割分化	○	×
	(d)規範	△	△

※ 規範の存在を直接示唆する記事はなかったが、規範があるときに制裁が生じると捉えられるため、規範は△にした。

- 「推進集団」は組織化された集団として、「利権集団」は機能する集団として捉えられていることがわかる。
- 一般には、組織化されることにより、作業効率の増加、責任の所在の明確化、コミュニケーションルートの確立という効用があり、一方で、各組織の自立性が強まること、組織間の階層化が進むこと、規範への過剰同調という弊害がある。

では、これらの分析から何が言えるかまとめる。考察の一つ目として、ドイツ氏の集団の定義を参考にすると、「推進集団」は組織化された集団、「利権集団」は機能する集団として捉えられている。このように組織化されると、一般には作業効率上がり、責任の所在が明確になる。またコミュニケーションルートが確立されるという効用がある一方、各組織が自立していくこと、組織間の階層化が進

むこと、規範への過剰同調といった弊害が出てくる。

考察の二つ目は集団思考についてだ。今回調査した新聞記事では、「推進集団」「利権集団」共に、集団思考の兆候に当てはまる特徴が見られた。これはつまり、新聞という外部からは、「原子力ムラ」に集団思考の特徴を見てとっていることを示しており、「集団思考」が生じる条件が整っていることを示唆している。これは Janis のモデルに当てはめて考えると、外からの圧力と内部の凝集力が生じているからこそ、「原子力ムラ」が形成されたというモデルに

考察2. 集団思考の兆候

特徴(評価軸)	推進集団	利権集団
(j)集団圧力	○	△
(k)集団外への紋切り型判断	×	×
(l)集団内での過信、理屈づけ	○	○

- 「推進集団」「利権集団」共に、集団思考の兆候にあてはまる特徴が見られる。
- 新聞という外部からは「原子力ムラ」に集団思考の特徴を見て取っていることを示している。つまり、「集団思考」が生じる条件が整っていることを示唆している。
- Janisの集団思考モデルによると、「元々凝集性が高い集団に対し、内的要因(内力)および外的要因(外力)の双方が生じることで、集団の凝集性が更に高まること」が集団思考の生じる条件だと捉えることができる。
- 「原子力ムラ」というものは何らかの内力と外力により創られていった、または強固になっていったもの、と捉えることができる。

当てはまると考えられる。つまり「原子カムラ」というのは、何らかの内力と外力によって創られていった。または強固になっていったと捉えることができる。

最後にまとめると、今回、「原子カムラ」とはどういうものか、どのように認識されているのかを、新聞を参考にみてみた。その結果分かったことは、新聞の中の「原子カムラ」というのは、「推進集団」あるいは「利権集団」という意味で使われていた。二つ目は、推進集団と利権集団の間には、「組織化された集団」と「機能する集団」の違いがみられた。最後に両集団には、集団思考の兆候として見られる特徴を確認することができた。

まとめ

本報告では新聞に見られる「原子カムラ」という言葉をグループダイナミックスの観点から分析し、何を意味する言葉として用いられているか明らかにした。その結果以下のことがわかった。

- 福島事故以後の新聞に見られる「原子カムラ」は「推進集団」または「利権集団」という意味で使われていることがわかった。
- 新聞に見られる「推進集団」と「利権集団」の間に「組織化された集団」と「機能する集団」の違いを見ることができた。
- 新聞に記述される両集団に集団思考の兆候として見られる特徴を確認することができた。

27

【質疑応答】

Q.

新聞記事の調査において、使っている言語が外から見たら横文字や隠語が多い、という捉え方で原子カムラと称しているような記事はなかったか？ 外から見ると、言語が集団を作っているようなイメージを持っている。

A. 竹中

そのようなことを原子カムラの特徴として書いている記事もある。外部の人には分からないような言葉を使って、情報をなかなか出そうとしない、というのも原子カムラの特徴の一つとして新聞記事に見られる。

C.

今回、他のセッションも聴いてみたが、もう少し分かりやすい言葉で話せば我々にも分かるのに、わざと横文字を使っていたりする。それは専門用語かもしれないが、原子カムラにいる人たちは、日頃から心がけておかなければ、いざ、一般の人と話をするとき、どうしてもそういう面がでてしまうのでは。

Q.

グループダイナミックスで分析することは、通常はその集団の構成員の行動や意思決定を分析して、その集団の特徴やメカニズムを分析するものだが、今回は集団について新聞がどう描いているのか、ということフレームワークで分析しており、それは少し次元がずれている。本来であ

れば、記述に対してこの分析概念を適用することの妥当性を検討するべきかと思うが、その点をどうお考えか？ 要するにこれは、新聞が述べていることの分析なのか、原子力ムラが備えている特徴そのものの分析なのか。

A. 竹中

これは新聞が述べていることの分析である。実際に原子力ムラがあるかないか、その実態はどうなっているのか、も新聞からの分析は難しい。ただし、新聞がどう特徴を捉えているのかについては捉えることができると思い、今回はこのグループダイナミックスを使った。

更Q.

もう少し補足すると、グループダイナミックスはその集団がどういう固有の性質を持っているのかということを記述するためのもの。しかし最初に木村先生が言われたのは、むしろ原子力ムラというのは一体何なのかという本質論をやるより、ムラと外の境界が相互作用でできているのかかもしれないということに、プロジェクトの基本的な問題関心があったとした。ムラがそもそもどういう性質なのかを突き詰めていく方向性は、180度違うような気がする。

A. 竹中

もちろん違うことだ。ただし、研究をする側として、この原子力ムラというのがどのように使われ意識されているのかを知らずに進めていくことはできないので、最初にここをポイントとして押えた。

2. 社会調査に見る「原子力ムラ」の捉えられ方

土田昭司（関西大学）

日本原子力学会では、2008 年より、学会員に対しては 2007 年より、毎年 1 月に社会調査を行っている。先ほど竹中氏より、専門家と一般市民との交流の機会ほとんどないという指摘があった。一般の人にとって、専門家が本当はどういう人達なのか分からないと同様に、実は専門家の人も、一般市民が本当は何を考えているのか分かっているのか。もちろん専門家と言えども、家に帰れば誰でも

市民だ。隣近所の付き合いもあり、市民としての感覚もあるが、しかし相対として世の中の人は何を考えているのかは、やはり調べてみないと分からない。学会員対象の調査もあるので、学会員が何を考えているのかと併せて報告したい。

首都圏住民と日本原子力学会員 を対象とする 「継続的な意識調査」

首都圏住民対象調査

第6回調査(2008より、毎年1月に実施)

学会員対象調査

第7回調査(2007より、毎年1月に実施)

- 基本的に「住民対象調査」と「学会員対象調査」で同じ質問項目
- 半数以上の質問項目は、継続して毎年同じにしている
- 2013年実施調査の主な質問項目
 - 1) 原子力に携わっている人たちや組織についての認識、2) 原子力規制委員会に期待すること、3) 原子力発電についてのリスク認知、4) 放射線・放射能についてのリスク認知、5) 原子力利用についての関心・賛否。

調査方法

首都圏住民対象調査

対 象: 首都圏30km圏内の住民を2段階無作為割当抽出
25地点無作為抽出、各地点から性年齢により20名割当抽出[20歳以上男女500名]

方 法: 割当留置法

回収数: 500名

学会員対象調査

対 象: 日本原子力学会員名簿から1400名を無作為抽出

方 法: 郵送調査

回収数: 559名(回収率39.9%)

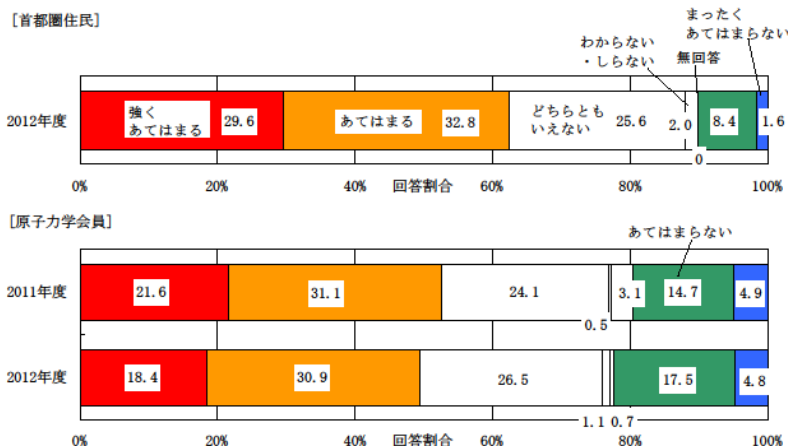
調査方法において、一つ申し上げておきたいのは、この後「市民」と単純に申し上げるが、首都圏在住の市民のことである。首都圏の方の考え方が、日本全国の考え方という訳ではないが、マスコミの方の多くは首都圏に住んでいるので、首都圏での雰囲気やマスコミののって情報として全国津々浦々に流れることは多いはず。ということで、首都圏の方に市民代

表になっていただく。専門家にもいろいろあるが、日本原子力学会の会員を専門家と定義して、会員より無作為に 1400 名を抽出して郵送調査を行っている。今年の 1 月のものは少し回収率が悪かった。通常は 40%を超えるぐらいで、多い年だと 600 名の後半台の時もある。

まずは認識のギャップから見てみる。原子力発電の利用については、市民と原子力専門家の間には、やはりギャップがある。とは言うものの、例外的にギャップの小さい認識もある。

福島第一原子力発電所の事故は、自然災害というより人災である

Q11. 以下のア)～ス)は、福島第一原子力発電所の事故以降、原子力発電についてよく聞かれる意見です。これらの意見は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。
ア) 福島第一原子力発電所の事故は、自然災害によるものというより、むしろ人災である

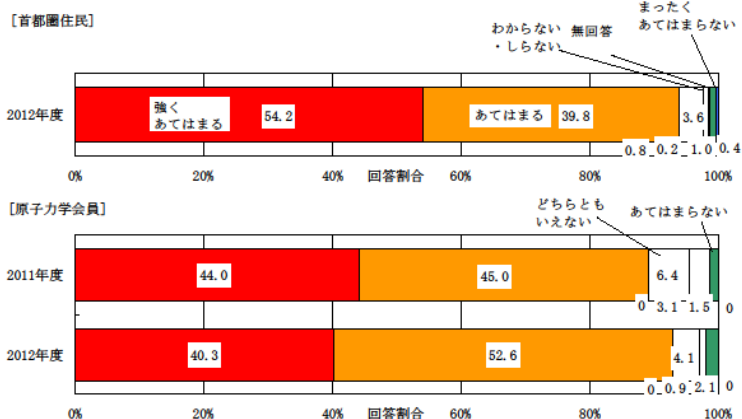


5

例えば、福島第一原子力発電所の事故は自然災害だったのか、人災だったのか。人災だと思っている市民は非常に多い。学会員もそれほどではないが、人災だと思っている方が主流だ。

立地地域の住民が避難しなければならないような事態も考慮しなければならない

Q11. 以下のア)～ス)は、福島第一原子力発電所の事故以降、原子力発電についてよく聞かれる意見です。これらの意見は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。
イ) 原子力発電の立地地域において、住民が避難しなければならないような事態も十分に考えなければならない



6

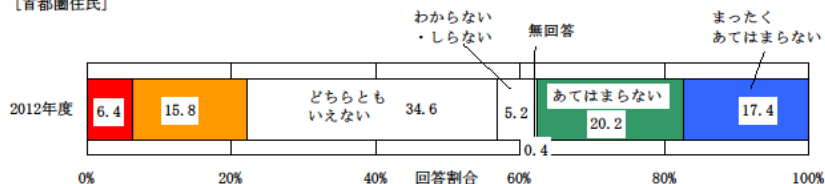
それから住民が避難しなければならない事態も考えるべきだ、についても、一般市民も学会員も同じように「そうだ」と考えている。これらはそう違いはないが、例外的なものだ。ほとんどの認識には正反対と言えるほどに、大きな認識のギャップがある。

私の見るところ、この認識の違いが「ムラ」と言われる大元じゃないかと思う。

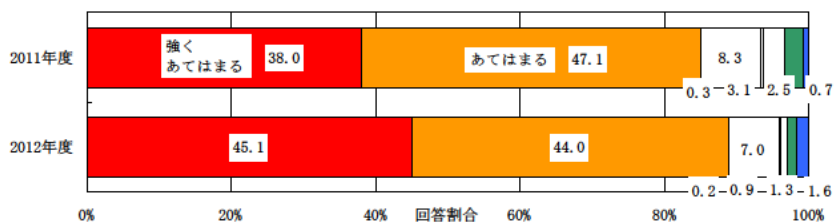
今後、原子力発電の安全を確保することは可能

Q11. 以下のア)～ス)は、福島第一原子力発電所の事故以降、原子力発電についてよく聞かれる意見です。これらの意見は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。
ウ) 今後、原子力発電の安全を確保することは可能であると思う

【首都圏住民】



【原子力学会員】



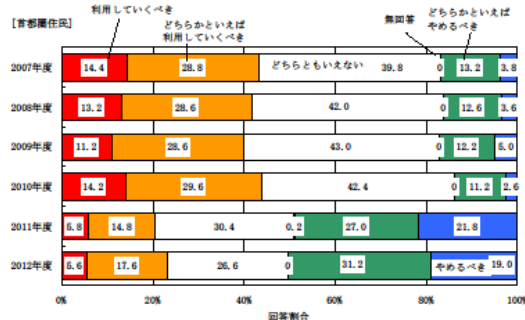
8

まず、安全を確保することは可能なかどうか。学会員は、ほとんどが「可能だ」と答えている。不可能だと考えている人はほんの数%。それに対し一般市民は、「可能だ」と考えておられるのは20%程度。「どちらとも言えない・判断できない」という人はどの認識でも一般市民には多いが、「そうは考えない」という方が3分の1以上はいる。

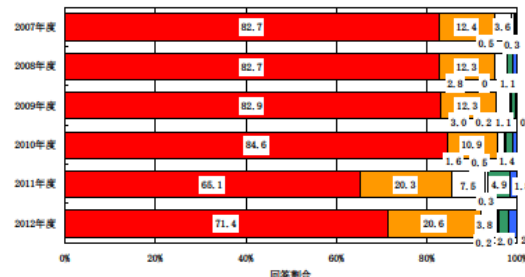
原子力発電の利用－廃止の意見

Q6. あなたは、今後、原子力発電を利用してゆくべきだと考えますか、それともやめるべきだと考えますか。右の選択肢のうち、あなたのお考えにもっとも近いと思われる数字の欄所に1つだけ○をつけてください。

【首都圏住民】



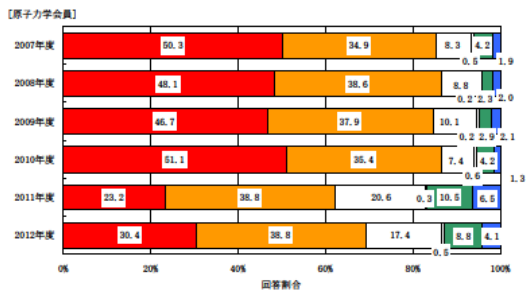
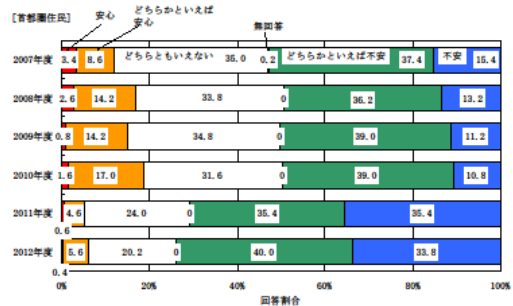
【原子力学会員】



あるいは推進すべきか、廃止すべきか。当然のことながら、原子力学会員はほとんどの人が進めるべきだと思っている。事故を受けて、強く言う人が若干減ったが、1年経てば回復傾向で、恐らく次の1月の調査ではもっと増えているだろう。しかし一般市民は、事故前もこの程度いたが、事故後は止めるべきだという人が大きく増えている。

原子力発電の安心－不安の意見

Q 8. あなたは原子力発電の利用について、安心ですか、それとも不安ですか。右の選択肢のうち、あなたのお考えにもっとも近いと思われる数字の箇所についてだけ○をつけてください。



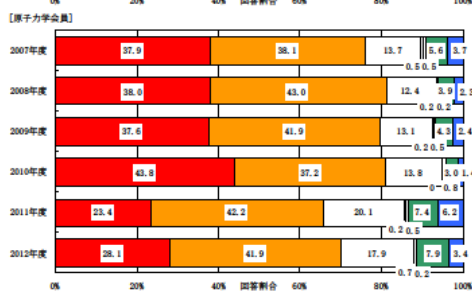
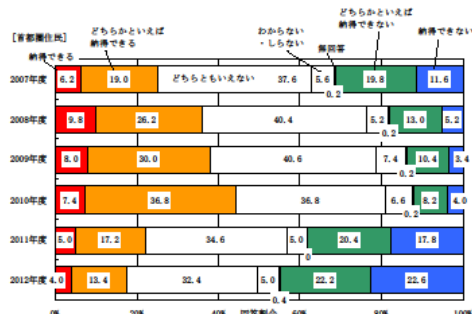
10

あるいは安心か不安か。これも先ほど同様に、一般市民は不安だ。

原子力に携わる人たちの安全確保の意識や努力を信頼、の納得の有無

Q 10. 原子力発電の利用に係わる意見として、たとえば以下のような意見が聞かれます。ア)～シ)のそれぞれの意見に対して、あなたは納得できますか。納得できませんか。あなたのお考えにもっとも近いと思われる数字の箇所についてだけ○をつけてください。

※ 原子力に携わる人たちの安全確保に対する意識や努力を信頼している

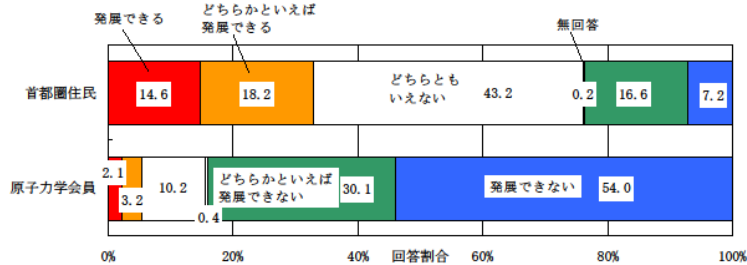


11

原子力に携わっている人を信頼できるかどうか。学会員は信頼できている。事故前は少しずつ一般の人からの信頼を勝ち得ていたのだが、事故の後の一般の人の回答は「信頼できない」。

原子力発電と日本の経済発展の関係

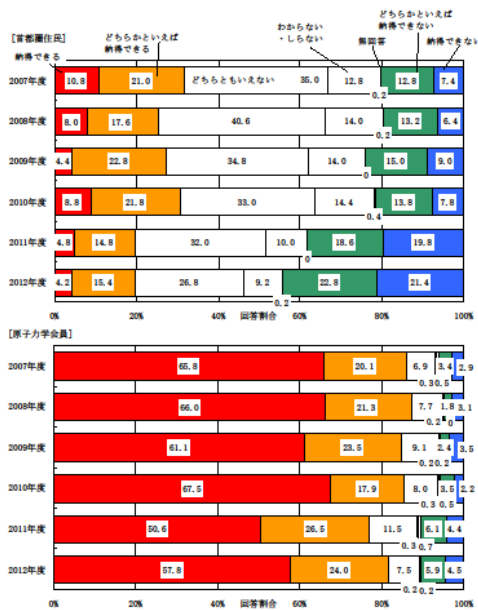
Q 9. 原子力発電がなくても、日本は経済的に発展できると思いますか、それとも発展できないと思いますか。右の選択肢のうち、あなたのお考えにもっとも近いと思われる数字の個所に1つだけ○をつけてください。



原子力なしに日本の経済は発展できるか。学会員のほとんどは、原子力なしに経済発展はないと考えている。しかし一般の人は、どちらとも言えないが主流だが、発展できるという人が3分の1程度いる。

近い将来に原子力発電に代わる発電方法はない、の納得の有無

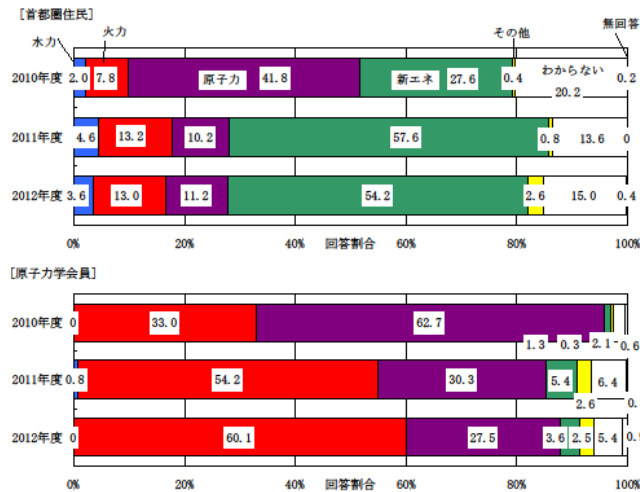
Q10. 原子力発電の利用に係わる意見として、たとえば以下のような意見が聞かれます。ア)～シ)のそれぞれの意見に対して、あなたは納得できますか、納得できませんか。あなたのお考えにもっとも近いと思われる数字の個所にそれぞれ1つだけ○をつけてください。
 Ⅱ) 日本での原子力発電による現在の発電量を考えると、近い将来に原子力発電に代わる発電方法はない



原子力に変わる発電方法はない。同じような結果だ。

20年後の日本の発電量の最も多い電源の予測

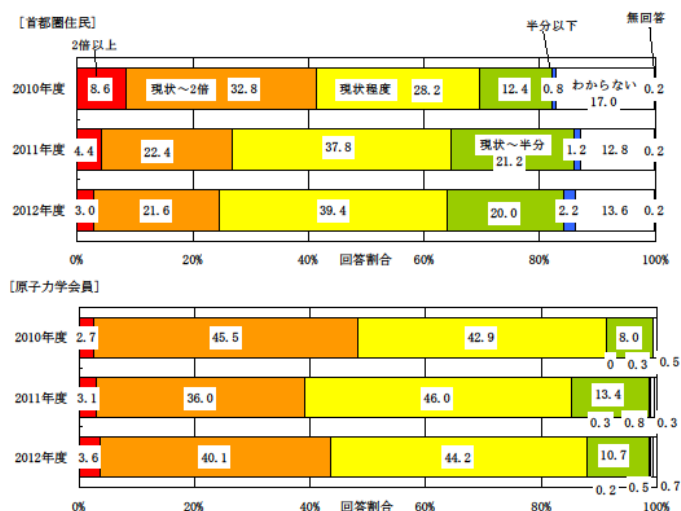
Q12. あなたは、20年後の日本では、発電量の最も多いのはどの発電だと思えますか。次の中から1つだけ選んで、番号に○をつけてください。



では、20年後の日本の発電に何が使われているか。原子力が減っているという予想は一般市民も専門家も同じだ。しかし代替えについて、原子力学会員は火力を挙げているのに対し、一般市民は新エネルギーを挙げている。この認識が正しいかどうかの議論はここではしないが、日本は民主主義の国なので、投票で選ばれた議員が方針を決めていく。そのところを考えていかないといけない。

20年後の日本の電力消費量の予測

Q15. あなたは、20年後の日本全体で使う電力の消費量はどのように変化していると思えますか。次の中から1つだけ選んで、番号に○をつけてください。



消費予測については、一般の方々がそんなに電気を使うようにはならないと思っている。しかし原子力学会員はますます増える、もしくは現状どおりと考えている。

このように、考えていることが全く違うという認識の違いで、私たちとは全く違う人達だ、話しにならない、となってしまう。

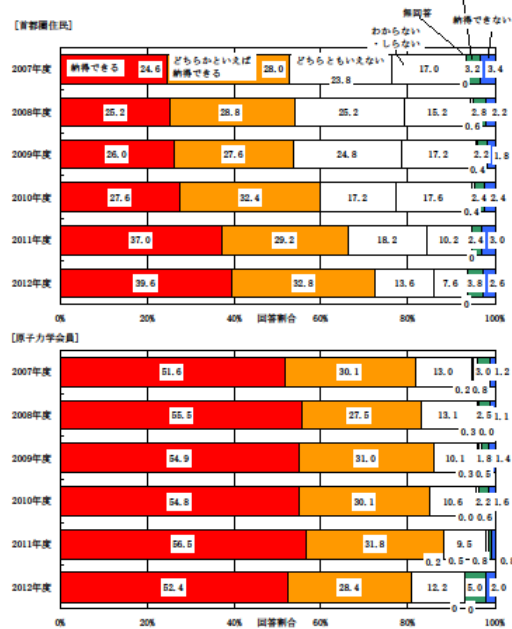
市民の認識が専門家の認識に 近づいてきているものもある

(高レベル放射性廃棄物最終処分地に対する認識)

とは言うものの、一般市民の認識が専門家の認識に、事故後近づいてきているものがある。それが高レベル放射性廃棄物に関する認識だ。

高レベル放射性廃棄物最終 処分地を早急に決定すべき、 の納得の有無

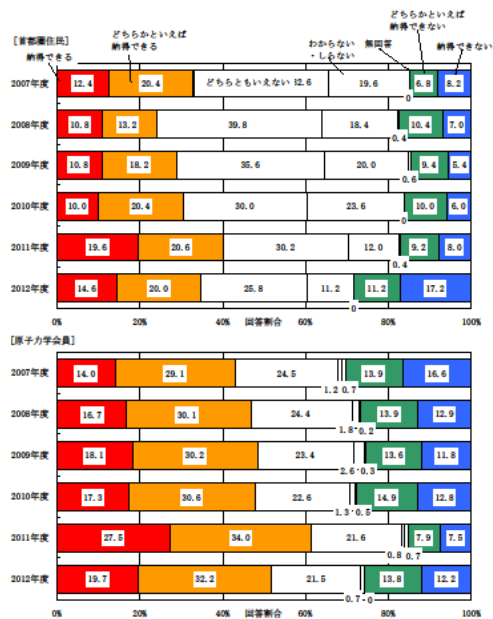
Q10. 原子力発電の利用に際する意見として、たとえば以下のような意見が聞かれます。ア) ーシ) のそれぞれの意見に対して、あなたは納得できますか、納得できませんか。あなたのお考えにもっとも近いと思われる数字の欄にそれぞれ1つだけ○をつけてください。
ケ) 高レベル放射性廃棄物の最終処分地を早急に決定しなければならない



わずかではあるが、早急に処分地を決定すべきだ、という意見が、事故後更に増えている。むしろ学会員の方が低落状況にある。

高レベル放射性廃棄物最終 処分地は当分の間決定不能、 の納得の有無

Q10. 原子力発電の利用に係わる意見として、たとえば以下のような意見が聞かれます。ア) へシ) のそれぞれの意見に対して、あなたは納得できますか、納得できませんか。あなたのお考えにもっとも近いと思われる数字の欄にもそれぞれ1つだけ○をつけてください。
コ) 高レベル放射性廃棄物の最終処分地は、当分の間決定できない



18

さらに決まるかどうか。決定は不可能だ、という意見に対し、そんなことはないという市民が増えてきている。それに対して学会員の方は、もうこれでダメかもしれないと考えている。

ここで強調したいのは、専門家が勝手に市民はこうだろうと決めつけているということだ。実は市民はそんなこと考えていないのに、市民はこうだから、と勝手に動いていることがありはしないか、が私の発表の一番のまとめだ。

そもそも、放射能・放射線に対する不安感が
市民と専門家では正反対

市民の理解不足か？
専門家が鈍感なのか？
ただし、市民の不安構造は単純ではない

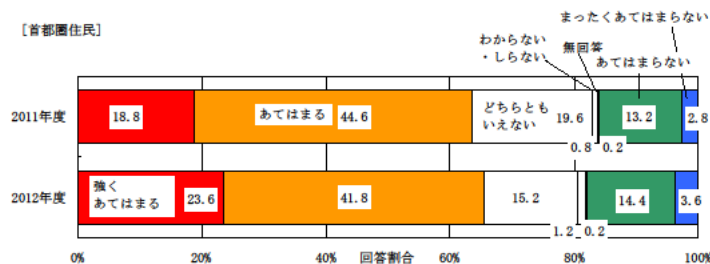
感情的なところを押えておく。これもよくマスコミで、専門家は鈍感だ。なぜ、怖いモノがあるのに平気なのか、と言われる。それに対し専門家は、ちゃんと理解していないからだ。理解すれば煙草の方が怖いということが火を見るより明らかなのに、煙草を自分の子どもの前で吸っている人が放射能を怖いというなんて、と言う。お互いに歩み寄れない。市民の不安の構造も、それほど単純なものではなさそうだ。

身のまわりの放射能汚染が心配だ

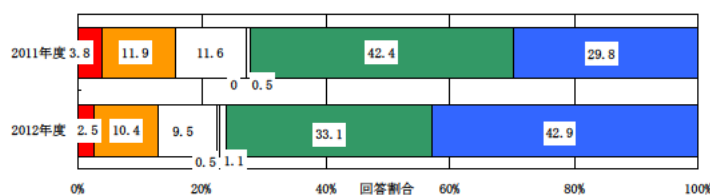
Q16. 以下のア)～サ)は、現在の放射能や放射線の状況についてよく聞かれる意見です。これらの意見は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。

ア) 自分のまわりの土壌や食品・水の放射能汚染のことが心配だ

〔首都圏住民〕



〔原子力学会員〕



20

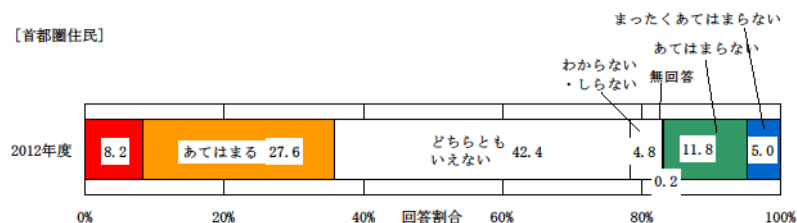
例えば、身の回りの放射能汚染が心配だ。学会員は全国に在住しているので、そのことを割り引かなければならないが、専門家は福島事故による放射能汚染をそれほど不安には思っていない。これはやはり、ムラ人のように見えるのだと思う。こんな恐ろしいモノがなぜ恐ろしくないのか、と。

店で販売されている福島県産の食品は安全だと思う

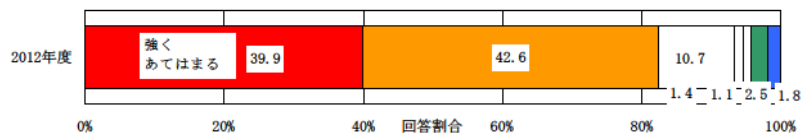
Q16. 以下のア)～サ)は、現在の放射能や放射線の状況についてよく聞かれる意見です。これらの意見は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。

サ) 店で販売されている福島県産の米や魚などの食品は安全だと思う

〔首都圏住民〕



〔原子力学会員〕



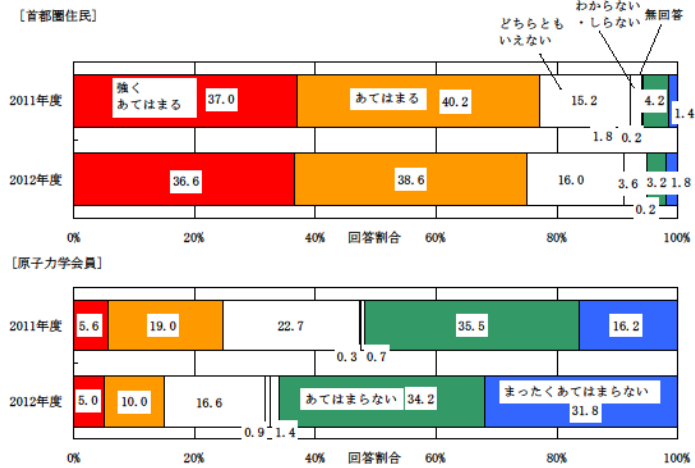
21

店で販売されている福島県産の食品は安全だ。専門家は、店で売られているからには、行政がちゃんとチェックをして、ダメなモノを売っているはずがないと思っている。検査を通過したものであれば大丈夫と考える。しかし一般の方にもそう考える方はいるが、多数派ではない。多くの方は分からないと思っている。

国で定めた安全基準が不安だ

Q16. 以下のア)～サ)は、現在の放射能や放射線の状況についてよく聞かれる意見です。これらの意見は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。

ウ) 国で定めた安全基準は、これで果たして十分に安全なのか不安だ



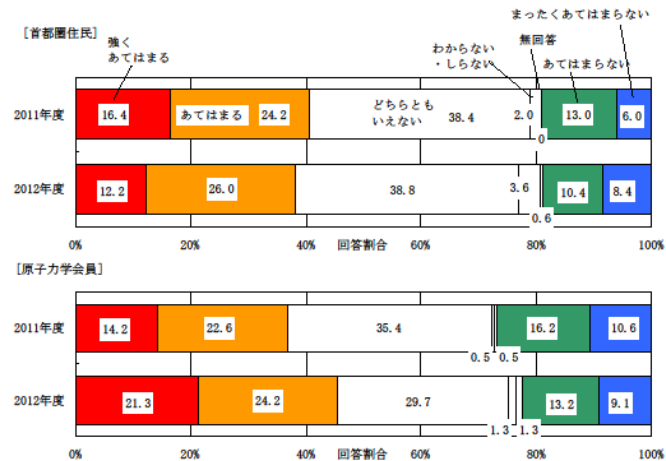
22

国で定めた安全基準が不安だ。一般の方は不安だ。国を信用していない。しかし学会員はそんなことはないと言っている。

放射能や放射線の状況について、国や専門家に大丈夫だと言ってほしい

Q16. 以下のア)～サ)は、現在の放射能や放射線の状況についてよく聞かれる意見です。これらの意見は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。

ケ) 放射能や放射線の状況について、国や専門家に大丈夫だと言ってほしい



23

国を信用していないと思われる結果だが、しかし国や専門家に大丈夫だと言ってほしい人は、40%程度いる。信用はしないけれども、大丈夫だと言って欲しい。どう考えたらいいのか分からず、頼るのは国であり専門家となる。そういった、少しアンビバレントな不安感を持っているようだ。

認識にギャップはあっても、市民は原子力専門家を否定しているわけではない

→ 専門家が自ら「ムラ人」になろうとしている

原子力に携わっている人・組織に対する印象

首都圏住民 ←「原子力に携わっている人・組織をどのように思いますか？」

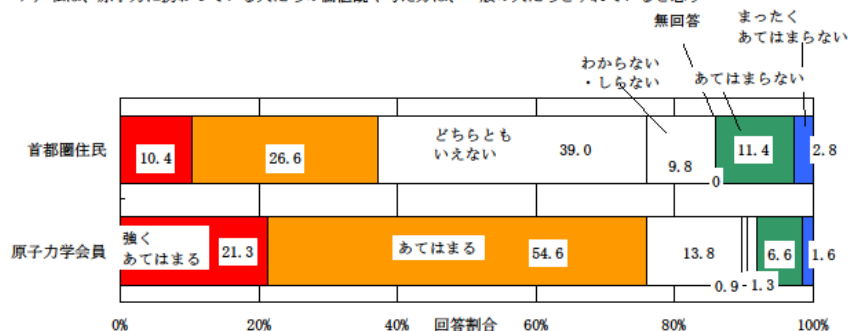
原子力学会員 ←「一般の人々は、原子力に携わっている人・組織をどのようにみていると思いますか？」

ここが本日のメインになるが、認識にギャップがあっても、市民は専門家を頭から否定しているわけではない。専門家が何を考えているか、市民はマスコミを通じて知るしかないように、実は市民が何を考えているかも、専門家はマスコミを通じて知るしかない。マスコミが本当に市民のことを分かって書いているかどうか。あるいは、マスコミの社の方針として記事を書くか。いろいろあると思う。新聞は世論を作る機能もあるので、それはそれでよい。

価値観・考え方が一般の人たちとずれている

Q17. (首都圏住民) 原子力に携わっている人たちや組織に対する印象として、以下のア～シ) は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。
(原子力学会員) あなたは、原子力に携わっている人たちや組織に対して、一般市民はどう思っているとお考えですか。以下のア～シ) について、あなたのお考えにもっとも当てはまる個所の数字に、それぞれ1つだけ○をつけてください。

ア) 私は、原子力に携わっている人たちの価値観や考え方は、一般の人たちとずれていると思う

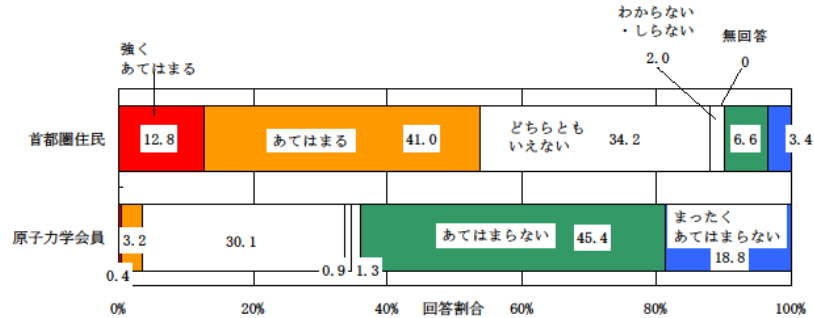


社会調査だと結果はどうか。一般市民の方には、原子力に携わっている人・組織をどう思うか？と質問した。全く同じ項目で、原子力学会員には、一般の人たちは原子力に携わっている人・組織をどのように見ていると思うか？と質問した。つまり、専門家には、自分たちはどのように見られていると思うか、一般の人たちには、自分がどう見ると判断するか、を質問した。
価値観・考え方がずれている。一般の方で「そうだ」と答えるのは4割にも満たない。「違う」という人も1割強いる。大半の人が「どちらでもない」。ところが原子力学会員の大部分は、一般の人たちから自分たちはずれていると思っている。本当はそうではないのに。

原子力に携わっている人たちに感謝している

Q17. (首都圏住民) 原子力に携わっている人たちや組織に対する印象として、以下のア)～シ)は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。
(原子力学会員) あなたは、原子力に携わっている人たちや組織に対して、一般市民はどう思っているとお考えですか。以下のア)～シ)について、あなたのお考えにもっとも当てはまる個所の数字に、それぞれ1つだけ○をつけてください。

イ) 私は、原子力に携わっている人たちに感謝をしている

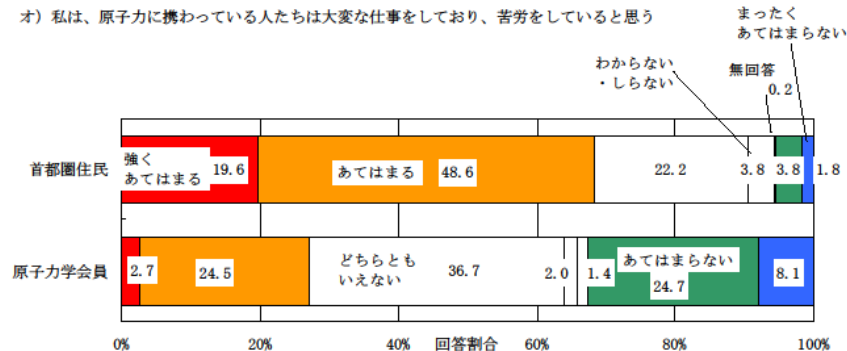


あるいは、原子力に携わっている人に感謝しているか。一般の人たちの半分は感謝している。でも、原子力学会員で一般の人たちから感謝されていると思っているのは数%しかない。それどころか、一般の人たちから感謝されていないとはっきり答えた人は6割を超えている。

大変な仕事をしており、苦勞をしていると思う

Q17. (首都圏住民) 原子力に携わっている人たちや組織に対する印象として、以下のア)～シ)は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。
(原子力学会員) あなたは、原子力に携わっている人たちや組織に対して、一般市民はどう思っているとお考えですか。以下のア)～シ)について、あなたのお考えにもっとも当てはまる個所の数字に、それぞれ1つだけ○をつけてください。

オ) 私は、原子力に携わっている人たちは大変な仕事をしており、苦勞をしていると思う



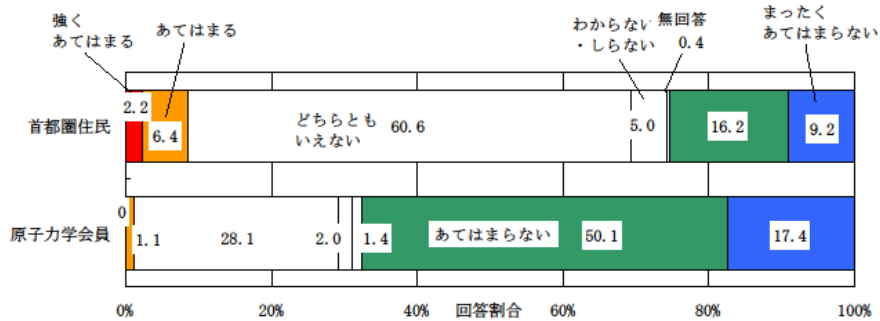
あるいは、原子力に携わっている人は大変な仕事をして苦勞している。一般の人たちの大部分がそう思ってくれている。でも、学会員はそうではないと思っているのが3分の1、そうだと思っている人もこの程度しかない。

原子力に携わっている人たちに好感を持っている

Q17. (首都圏住民) 原子力に携わっている人たちや組織に対する印象として、以下のア)～シ) は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。

(原子力学会員) あなたは、原子力に携わっている人たちや組織に対して、一般市民はどうしているとお考えですか。以下のア)～シ) について、あなたのお考えにもっとも当てはまる個所の数字に、それぞれ1つだけ○をつけてください。

コ) 私は、原子力に携わっている人たちに好感を持っている



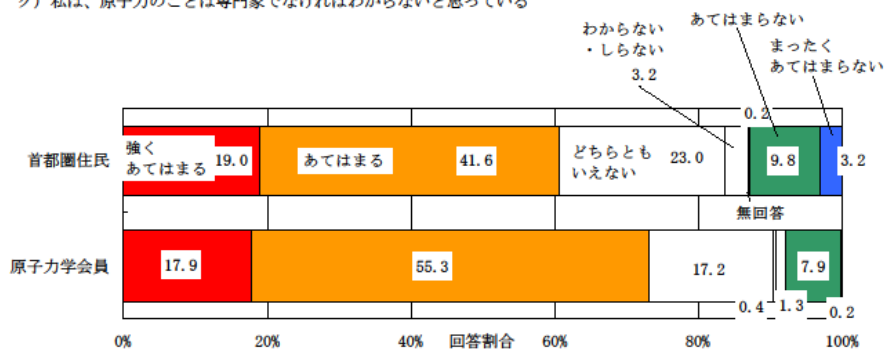
あるいは、好感を持っているか。確かに、原子力に携わっている人を好きだという人はあまりいない。6割の人が「分からない」。違うという人もそこそこいる。けれども原子力学会員は、自分たちを好きだなんて絶対思っていない、と思っている人が大部分だ。心理学では好意というのはお互いさまで、嫌われていると思う人間を好きになる人間はいない。悪循環に陥っている。

原子力のことは専門家でなければわからないと思う

Q17. (首都圏住民) 原子力に携わっている人たちや組織に対する印象として、以下のア)～シ) は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。

(原子力学会員) あなたは、原子力に携わっている人たちや組織に対して、一般市民はどうしているとお考えですか。以下のア)～シ) について、あなたのお考えにもっとも当てはまる個所の数字に、それぞれ1つだけ○をつけてください。

ク) 私は、原子力のことは専門家でなければわからないと思っている

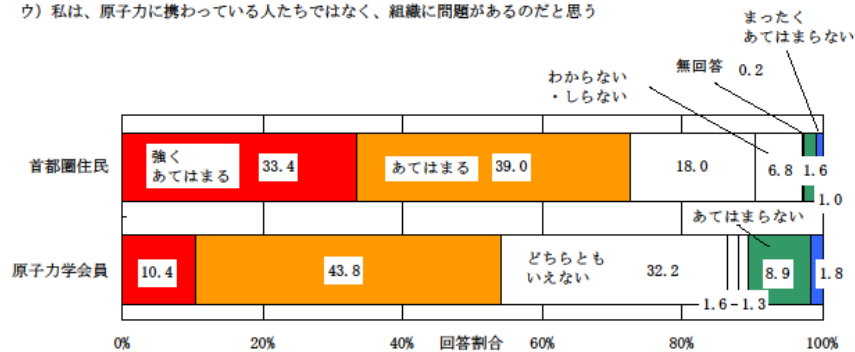


専門家でなければ分からない。学会員は自負心があり、そう思っている。一般の人たちも、原子力学会員ほどではないが、そう認識している。というように、理解しあえる素地がこんなにあるということが、社会調査では浮かび上がってくるのに、なぜかお互いに理解しえないと思ひこんでいる。なぜというより、これを何とかしなければいけない。

人たちではなく組織に問題があるのだと思う

Q17. (首都圏住民) 原子力に携わっている人たちや組織に対する印象として、以下のア)～シ) は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。
(原子力学会員) あなたは、原子力に携わっている人たちや組織に対して、一般市民はどうしているとお考えですか。以下のア)～シ) について、あなたのお考えにもっとも当てはまる個所の数字に、それぞれ1つだけ○をつけてください。

ウ) 私は、原子力に携わっている人たちではなく、組織に問題があるのだと思う

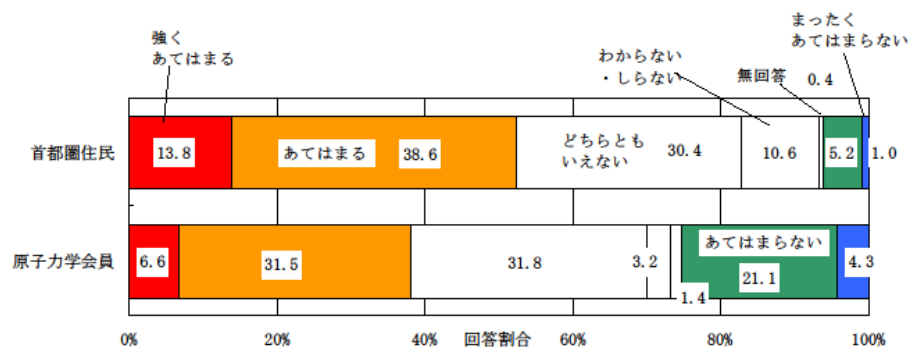


先ほどの新聞記事でもあったが、一般の方々は一人一人の人間はいい人たちだけど、組織人だから、という見方が強い。学会員もそう答えているので、そういう面があるのかもしれないが、これも解決の糸口の一つかと思う。

自由に意見が述べられないのだと思う

Q17. (首都圏住民) 原子力に携わっている人たちや組織に対する印象として、以下のア)～シ) は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。
(原子力学会員) あなたは、原子力に携わっている人たちや組織に対して、一般市民はどうしているとお考えですか。以下のア)～シ) について、あなたのお考えにもっとも当てはまる個所の数字に、それぞれ1つだけ○をつけてください。

キ) 私は、原子力に携わっている人たちは自由に意見が述べられないのだと思う

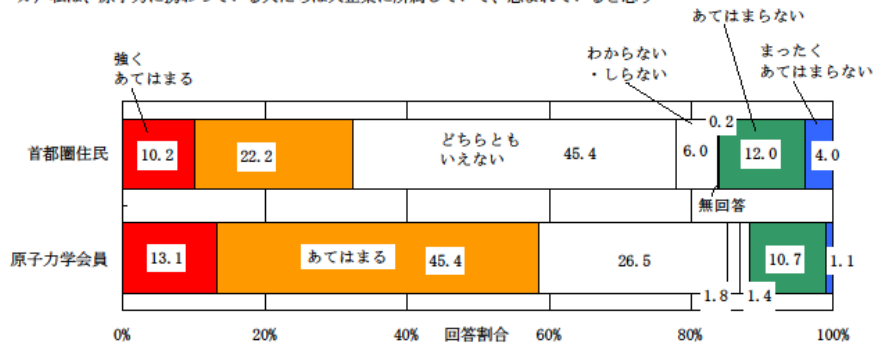


同じことだが、自由に話せないのだと思う。そう思っている。

大企業に所属していて、恵まれていると思う

Q17. (首都圏住民) 原子力に携わっている人たちや組織に対する印象として、以下のア)～シ)は、あなたのお考えにあてはまりますか、あてはまりませんか。それぞれ1つだけ○をつけてください。
(原子力学会員) あなたは、原子力に携わっている人たちや組織に対して、一般市民はどうしているとお考えですか。以下のア)～シ)について、あなたのお考えにもっとも当てはまる個所の数字に、それぞれ1つだけ○をつけてください。

カ) 私は、原子力に携わっている人たちは大企業に所属していて、恵まれていると思う



それからこれはエリート意識の裏返しかもしれないが、大企業に所属していて恵まれていると思う。学会員の半数以上はそう思っている。一般の人はそのように見ていない。自分たちはエリートだという意識を、やはり持っているのだと思う。でも一般の人はそういう目ではあまり見ていない。

という社会調査の結果から、認識の違いによって境界が生まれているのではないか、と言える。

【質疑応答】

Q.

専門家の定義を、なぜ「学会員」としたのか？

A. 土田

技術的な問題で、学会員であればデータが取れるからだ。ご指摘の通り、専門家を学会員とするのは少し問題がある。というのは、私の専門は社会心理学だが、原子力学会員だ。私のところに調査票が送られてきたこともある。この学会にはいろんな構成員がいる。ひょっとすると学会員ではあるが原子力の専門家ではないと思っている人も結構いるはずだ。それから専門家というのは、学術的とか技術力があるとしているが、定義としては原子力学会以外の学会に属している専門家も当然いる。無理があることはご指摘の通りだ。

更Q.

専門家とはそもそも、「責任を取る組織」のことだと、要するに責任も取れないのは専門家ではない、という指摘をよく受ける。

A. 土田

非常に難しい問題だ。専門家に責任を取れということに関しては、領域をはっきりさせる必要がある。例えば、東京電力の経営に対して学会が責任をとれとなると、それは違う。医者の学会であれば、自ら治療している場合、その治療方針に関して責任を取るというのは分かる。ところが

原子力学会の場合、原子力推進を定款で明記している学会とは言うものの、原子力の政策なり経営に学会がどれほど関わっているか、甚だ疑問だ。例えば、福島事故調のこともあるが、マスコミなどでは自らデータを集めないことに関して批判もあるやに見受けるが、学会が捜査力も権限もない中で、どこまで調べられるのか。となると、この手の学会は技術・知見を深める、つまりアイデアを出すことが目的であり、それを使うことに関しては何ら権限を持っていない。この学会に関しては、責任の取り方は非常に難しい。とは言うものの、目的を知らずマンハッタン計画に関わった研究者、あるいは薄々気がつきながら進めていた研究者に全く責任が無かったかと言われれば、これもまた難しい問題だ。そういう意味で、責任はあるのだが、責任を取れと言われたとき、「あなたはどのような意味で責任を取れと言っているのか」と聞かざるを得ないような組織と考えている。

3. 「原子カムラ」の境界を超えるために「フォーラム」の取り組み

木村 浩（パブリックアウトリーチ）

再掲になるが、「原子カムラの境界とは？」ということで、思い込みによるギャップを境界と表現し、今回の2件の講演の中で思い込みというものがどんなものか、少しでも明らかにできたのではないかと思う。これをどう乗り越えるかを示す必要があり、我々なりに考えた提案を紹介したい。

では、どうすればいいのか。境界は思い込みによってできているならば、お互いの思い込みが強まっていく構造を止めることが

第一歩。思い込みが強まる一つの要因として、確証バイヤスがある。ある行動について自分なりに仮説を立て、仮説を証明するような事柄を探して、仮説を確信していくという循環だ。思い込みが必ずしも全部に当てはまるわけではないということを認識できれば、この構造を止めることができるかもしれない。

再掲：「原子カムラ」の境界とは？

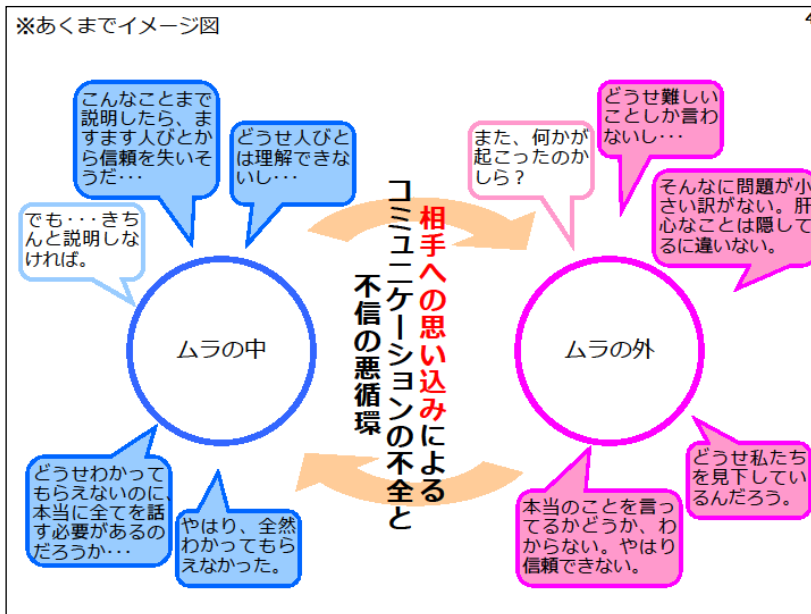
- お互いが何らかの思い込みをして、お互いのギャップが広がった結果、コミュニケーションの不全と不信の悪循環を招いているのではないか。
- 「原子カムラ」という言葉は、相手への思い込みを顕著に表している言葉かもしれない。



- お互いの思い込みによるギャップを「原子カムラ」の境界と表現することとした。

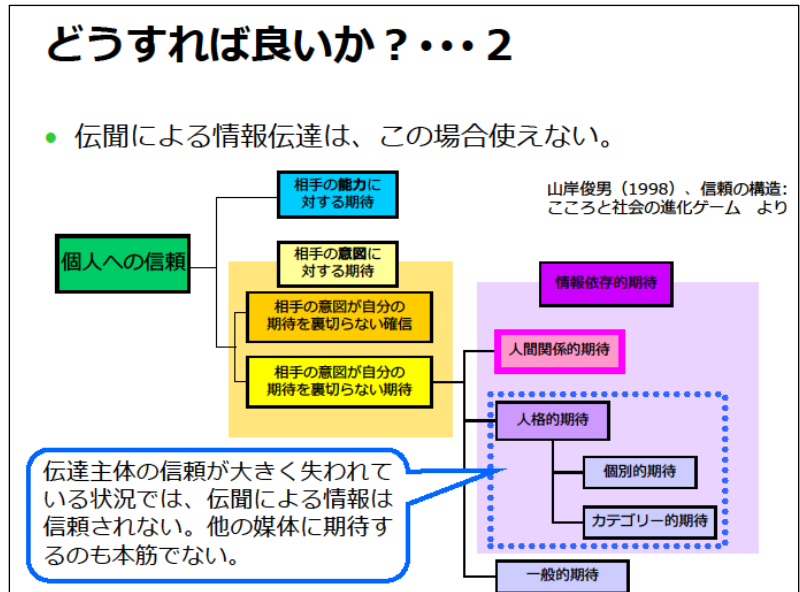


- まず、この思い込みそのものはどんなものを明らかにしなければならない。
- そして、これをどう乗り越えていくかを示す必要がある。



これは先ほど示したイメージ図だが、ムラとその外があった場合、さまざまな事を思い、相手への思い込みが強くなり、コミュニケーションの不全と不信の悪循環が起きてしまう。この図中の色がついている部分、ほとんどだが、これらは思い込みの可能性があるものだ。これをどうにかして変えていきたい。

もう一つ、こちらも先ほど示した信頼の図だが、伝聞的な構造を使って信頼を得たり、情報を伝えるのは難しい。それは相手側が、業界そのものに何となくの不信感を抱いている可能性があるからだ。伝聞による情報伝達は信頼性に関わる情報を伝えるには不向きで、直接伝えて、自分の経験として知っていただくことが必要になってくる。



目的と要件

● 市民と専門家が、お互いに尊重することを可能とする仕組みを創り出す。＝「フォーラム」

- － お互いに思い込みによるイメージが必ずしも正しくないことを知り、さまざまな個人の存在を認める、という状態を目指す。
- － 市民と専門家が対等な立場でのコミュニケーションを通じて、知識、情報量、経験、社会的立場、価値観、人生観等までを含んだ、お互いのコンテクストを知り、人となりを理解する。
- － 伝聞ではなく、直接のコミュニケーションという手段をとる。

6

今回、市民と専門家がお互いに尊重することを可能とする仕組みを創りだすべく、「フォーラム」を立ち上げた。このフォーラムでは、お互いに思いこみによるイメージが必ずしも正しくないことを知り、さまざまな個人の存在を認めるという状態を目指している。もう少し噛み砕くと、市民と専門家が対等な立場で直接のコミュニケーションをすることが大切で、その上で知

識、情報量、経験、社会的立場も踏まえ、更には価値観、人生観といった、その人の人となりを理解していくものだ。

ここで尊重という言葉の理解として、日本語で「共感」と訳されるシンパシーとエンパシーのセンスが参考になりそうだ。シンパシーは、共感の一つで本人になり代わって考えるという「感情移入」。それに対してエンパシーは、本人の気持ちは本人にしか分からないという「自己移入」。国語の問題で、「その時、主人公はどんな気持ちでしたか？」

はシンパシー型、「あなたが主人公と同じ立場に置かれたらどんな気持ちになると思いますか？」がエンパシー型。エンパシーは自分がありながら、その人のことを最大限理解しようとするが、その人にはなれない、という共感である。尊重のためにはそのようなセンスが必要なのではないかと思う。つまり、「自分とは異なる考え方も、また真である」ということを認めることだ。それをお互いにすることで、多様な価値観や意見を認められるのではないかと考えている。しかし実は、そのような雰囲気を作ることが難しい。

「尊重」とは何か？

- 参考として…シンパシーとエンパシー（両者とも「共感」と訳される）

- － シンパシー：感情移入・・・本人になりかわって考える。
- － エンパシー：自己移入・・・本人の気持ちは本人にしかわからない。

シンパシーとエンパシーの違いは微妙なものです。最大の違いは発想の前提にあって、相手のことがわかるという前提で考えるのがシンパシー、相手のことがわからないという前提で考えるのがエンパシーです。シンパシーは「感情移入」、エンパシーは「自己移入」と訳します。
・・・（中略）・・・

国語の問題でいうと、「その時、主人公はどんな気持ちでしたか？」と問えばシンパシー型、「あなたが主人公と同じ立場に置かれたら、どんな気持ちになると思いますか？」と問えばエンパシー型です。シンパシー型だと「主人公の気持ちになって考えましょう」ということ。一方、エンパシー型では「主人公の気持ちは本人にしかわからない」ということで、自分自身に置き換えて考えます。

「対話流～未来を生み出すコミュニケーション」清宮善美代・北川達夫、三省堂

- エンパシー的な考え方を身に付け、**「自分とは異なる考え方も、また真なり」**と考えることができるようにならなければならない。
- そのように考えることを良しとする雰囲気を作らなければならない。

目的を達成するための工夫

- 参加者が公平だと思える場作りをする
 - － 社会調査の実施とそれに基づく参加者の選択
 - － 少人数の「グループワーク」を中心とし、市民と専門家が対等に話せる雰囲気作りをする。
 - － 記録はできるだけそのまま公開する。
 - ⇒ その場で話したことは（よほどのことがない限り）隠されない、という気持ちを持てる。※よほどのこと：個人情報、個人攻撃、社会的に問題となる発言等
- 冷静な話し合いを導く
 - － コミュニケーション・マニュアルの整備
 - － サブファシリテーターの設置
 - ⇒ 忌憚のない話し合いができるようにする。
 - ⇒ 話されている内容が何かを見きわめ、話し合い「で」すれ違わないようにする。同じ考えは同じ、異なる考えは異なる、とわかるようにする。
- その場を客観的に捉える
 - － 参加者にファシリテーターをなるべく経験してもらう。
 - ⇒ 自分を話し合いの外に置き、話し合いを客観的に見るチャンスとする。ファシリテーションを経験することで、コミュニケーションのときに、自分と異なる意見に対しても冷静になれる。

お互いに尊重し、互いの価値観や意見を認め合う状況を作るために工夫したのは、まず、参加者が公平だと思える場づくりだ。フォーラムの構造を簡単に言えば、首都圏の市民の方から10名、学会員から10名の20名となっており、この20名の参加者が公平だと思える場づくりが大切となった。そのためには、社会調査に基づ

き参加者を募り選択した。そして少人数のグループワークを中心に、市民と専門家が対等に意見をぶつけ合える場をつくり、専門家が圧倒的に有利になるような話題はできるだけ避けるような導入をした。また、よほどのこと（個人情報や社会的問題となる発言）がない限り、記録はできるだけそのまま公開し、発言は隠されないという気持ちを持っていただいた。

2点目の工夫は、冷静な話し合いを導くということ。原子力の話題は感情的な意見のぶつかり合いになりがちだが、コミュニケーションのマニュアルをあらかじめ事務局にて整備しておいた。とはいえ、そのマニュアルは分量があり難しいものだったので、当日改めて重要項目を絞り、認

識共有を徹底した上で話し合いに臨んでいただいた。それを支援するため、運営側もサブファシリテーターとしてグループに入り、話し合いのルールから逸脱しないようにした。これにより、グループ内の話し合いを円滑に進め、不必要なぶつかり合いをできるだけ起こさないように設定した。

3 点目として「その場を客観的に捉える」とあるが、お互いのいろいろな意見を認識していただくために、参加者自体にファシリテーターをお願いした。いきなりやるのは大変だが、何回か経験するとできるようになる。そうすると自分の意見を主張するだけでなく、一歩引いて相手の意見を引き出すこともできるようになり、冷静にさまざまな意見に耳を傾けることが可能になってくる。

実際のフォーラムの設計にあたっては、フォーラム自体を作り出すことが我々の目的だった。参加者の方には、「どうしたら市民と専門家がお互いに尊重し、原子力カムの境界を越えることができるかを見出すべく議論すること」に賛同して集まっていた。テーマ・専門家ネットワークについては、このフ

フォーラムの設計

- 観察者（研究）の目的設定
 - － 市民と専門家が、お互いに尊重することを可能とする仕組みを創りだす。
- フォーラムの目的設定
 - － どうしたら、市民と専門家がお互いに尊重し、「原子カム」の境界を越えることができるか、を見出す。
- テーマ・専門家ネットワーク
 - － 情報「提供」の場ではないので、いわゆる講義はしない。
- 参加者の募集、決定
 - － 社会調査の実施と同時に参加者を募集※。市民参加者、専門家参加者それぞれ 10 名程度。社会調査結果に基づいて参加者を決定
 - － 市民参加者：性別・年齢・原子力利用に関する項目
 - － 専門家参加者：（性別・）年齢・専門領域
- フォーラムの内容、段取りの決定
 - － 全 5 回を開催。隔週土曜日 13 時～16 時半（原則）。
 - － 初回は「原子カム」について話し合う。その後は、参加者の意思によって柔軟にテーマを変更する。
 - － 「グループワーク」を中心として、「オープンエンド」の議論を展開する。
 - － 個人が特定できないように注意し、話し合いの内容は全公開する。

※市民参加者については、追加募集を行った。

フォーラムは情報提供型の話し合いではなく、互いの人となりを知ることが目的なので、講師による講義はしなかった。テーマも第 1 回目は運営側でセットしたが、第 2 回目以降は参加者に決めていただくという方針を取った。

参加者の募集、決定にあたっては、先ほどの土田先生の社会調査と同時に、もしくは直後に参加者を募集し、社会調査の性別・年齢・原子力利用に関する項目の結果に沿って、できるだけ市民の縮図になるように参加者を選定した。専門家は性別・年齢・専門領域をもとに選んだ。

フォーラムの実施にあたっては、同じ 20 名で全 5 回とし、隔週の土曜日、13 時から 16 時半に実施した。グループワークを中心に、オープンエンドの議論を展開し、何かの結論を導くわけではない、とした。また全公開も徹底した。

これが全 5 回の記録になる。
第 1 回が「原子カムラとはなん
だろうか」。第 2 回は「なぜ、
原子カムラはなんとなく良い
イメージを持たれないのか？
そのイメージを払しょくする
には、どうしたら良いのだろ
うか？」。第 3 回は「原子力に
関心を持つためにはどうし
たらよいか？ 無関心は本
当にダメなのか？ 原子力
への関心とはそもそも何
なのか？」。第 4 回は「原子力
は本当に安全

- 第1回：2013年5月25日（土）13:00～17:00
実施内容：「『原子カムラ』とはなんだろうか？」
- 第2回：2013年6月8日（土）13:00～16:30
実施内容：「なぜ、原子カムラはなんとなく良いイメージを持たれないのか？そのイメージを払拭するには、どうしたら良いだろうか？」
- 第3回：2013年6月22日（土）13:00～16:30
実施内容：「原子力に関心を持つためにはどうしたらよいか？ 無関心は本当にダメなのか？ 「原子力への関心」とはそもそも何なのか？」
- 第4回：2013年7月6日（土）13:00～16:30
実施内容：「原子力は本当に安全か？ 原子力は本当に必要か？原子力はやめることができるのか？ エネルギーの中の原子力の位置づけは？」
- 第5回：2013年7月20日（土）13:00～16:30
実施内容：「もう一度考えよう・・・『原子カムラ』はあるのか、ないのか、何なのか？ 「原子カムラ」というものをどうしたらよいか？」

か？ 原子力は本当に必要か？ 原子力はやめることができるのか？ エネルギーの中の原子力の位置づけは？」。第 5 回は最後のまとめなので、「もう一度考えよう・・・原子カムラはあるのか、ないのか、何なのか？ 原子カムラというものをどうしたらよいか？」。これらのテーマを決めるのにも、かなり気をつけた。第 2 回のテーマを見ると、なんとなく原子力推進的なテーマになってしまったが、参加者より「このフォーラムの目的は、お互いを理解して、お互いの意見を聞きあうためと聞いていたのに、やはり原子力推進するためのものなのか？」と指摘があった。第 3 回以降はアンケートで参加者の意思を確認したり、事務局でもかなり気をつけて進めた。第 4 回は原子力のかかなり中心的な議論を行ったが、第 3 回までの原子力周辺部の議論で、コミュニケーションのルールが浸透してきたので、中心的なテーマでも感情的にならずに議論できる素地ができていたと判断したからだ。

例：第3回のプログラム

時間	実施内容
12:30	開場・受付開始
13:00	第3回フォーラム開始
13:00～13:30	【イントロダクション】 ・開会挨拶、振り返りを兼ねて自己紹介 ・前回の振り返り（木村）
13:30～14:45	【グループワーク1：テーマについて話し合う】 テーマ：原子力に関心を持つためにはどうしたらよいか？ 無関心は本当にダメなのか？ 「原子力への関心」とはそもそも何なのか？ キーワード：原子力アレルギー、原子力のイメージ、モチベーション ・3グループにわかれて、話し合います。 【全体共有1】 ・各グループ5分で、テーマについての話し合いを発表します。
14:45～15:00	【休憩・質問づくり】 ・各自で、各グループのまとめに対して、質問づくりをします。
15:00～16:05	【グループワーク2：質問への答えをつくる】 ・グループワークで、回答をまとめます。 【全体共有2】 ・各グループ3分で、回答を発表します。
16:05～16:30	【振り返り】 ・アンケート記入 ・本日のフォーラムの振り返り
16:30	終了

これは第 3 回のプログラムだが、大きくは二つのグループワークが中心で、講義タイプではないことがお分かりいただける。

これは雰囲気の写真だ。実際には個人情報を出せない
ので、これは運営陣の準備
時の様子だ。おおよそグ
ループあたり 6~7 人で、こ
の中に専門家と市民の方が
3 名から 4 名ずつ入る。基
本的には付箋などを使い、ブ
レーンストーミングのスタ
イルを取る。参加者の中か
らファシリテーターを一人
決め、運営側から用意した
二人のサブファシリテーター
が支援しながら進めてい



▶グループワークは、6~7名のグループで行い
ます。どのメンバーとグループになるかは、く
じ引きで決めます。くじ引きは公平性を高める
手段です。



▲グループワークの後は、全体共有をします。



▲グループの中の1名がファシリテーター
になります。ファシリテーターがグループ
の話し合いを進めます。ファシリテーター
もくじ引きで決めます。
運営側からは各グループに2名のサブ・
ファシリテーターを用意し、ファシリテ
ーターを支援します。

※イメージ。実際のフォーラム参加者情報は
非公開のため、運営側の予定演習の様子です。

12

く。サブファシリテーターは内容にタッチしないように縛りを設け、内容自体は参加者が決めて
まとめるというスタイルを守りながら、最後に 3 つのグループに分かれていたものを全体で共
有するという設計にした。

フォーラムを終えて …フォーラム後インタビューより

13

- フォーラム参加前は…
市民は専門家に「難しいことを言うんだろうな」「お高くとまっているん
だろうな」というイメージを持ち、
専門家は市民に「感情的に批判してくるんだろうな」「聞く耳を持たない
んだろうな」というイメージを持っていた。
- お互いの思い込みによるイメージで、お互いに距離を取ってしまっている
状態＝境界のある状態
- フォーラム参加後は…
市民は「専門家のただの人なんだ」「専門家のなかにもいろんな考え方が
あるんだ」ということに気づき、
専門家は「市民から必ずしも責められるというわけではないんだ」「市民
にはちゃんと話をすれば通じるんだ」ということに気づいた。
- 同じ意見になることは必ずしも必要なく、自分とは異なる意見であるが、
なぜそう考えるのかをお互いに理解することが大切なのではないか。
- 境界というものは、お互いの思い込みでできていて、直接会って話し、お
互いの人となりを理解すれば、境界は越えられるかもしれない。

フォーラム後のインタビュ
ーをいくつか紹介したい。市
民は専門家に「難しいことを
言うんだろうな」「お高くとま
っているんだろうな」という
イメージを持ち、専門家は市
民に「感情的に批判してくる
んだろうな」「聞く耳を持た
ないんだろうな」というイメ
ージを持っており、まさにお互
いの思いこみによるイメージ
で距離をとってしまっている
状態だった。これが参加後、
市民は「専門家もただの人な

んだ」「専門家の中にもいろんな考えがあるんだ」ということに気づき、専門家は「市民から必
ずしも責められるというわけではないんだ」「市民にはちゃんと話をすれば通じるんだ」という
ことに気づいたとのこと。また「同じ意見になる必要は必ずしもなく、自分とは異なる意見でも、
なぜそう考えるのかをお互いに理解することが大切なのではないか」「境界というものは、お互
いの思いこみでできていて、直接会って話し、お互いの人となりを理解すれば、境界は越えられ
るかもしれない」という前向きな意見が、市民・専門家の両者から出てきた。

そして最後のアンケートでは、市民参加者から「意見の隔たりを越える前に、冷静に意見を言える、この人となら意見を言えるし、聞ける、という人と人との信頼関係を築くことが大切。それには時間をかけて、継続的な取り組みが必要と感じた」「信頼関係を築くためには、きれいごとを言うだけでなく、不都合なことも正しく情報公開し、

スピーディに提供していくのが一番だが、専門家が根本的に一般人をバカにして、無能扱いして、どうせ無理だろ？的な心掛けでは、信頼なんかされないと思った。対等な関係で話し合えなければ、真の理解など得られず、不信感にしかならないと思った。情報を正しく出すこともまた必要と思う」という意見が寄せられた。専門家からは「信頼の損失は大きく、地道にわかりやすい説明をくり返していくことが境界を越えるためには必要なことを痛感した」「説明不足、努力不足を毎回痛感。たえまぬ努力で失われた信頼を少しでも回復させたい」という意見が聞けた。ということで、ある意味では多様な意見の尊重と、お互いの中での認識が表れていると思う。

フォーラムを終えて

・・・第5回フォーラムアンケートより

〔市民参加者〕

- 意見のへだたりを越える前に、冷静に意見を言える、この人となら意見を言えるし、聞ける、という人と人との信頼関係を築くことが大切。それには時間をかけて、継続的な取り組みが必要と感じました。
- 信頼関係を築くためには、きれいごとを言うだけでなく、不都合なことも正しく情報公開し、スピーディに提供していくのが一番ですが、専門家が根本的に一般人をバカにして、無能扱いして、どうせ無理だろ？的な心掛けでは、信頼なんかされないと思いました。対等な関係で話し合えなければ、真の理解など得られませんし、不信感にしかならないと思いました。情報を正しく出すこともまた必要と思います。

〔専門家参加者〕

- 信頼の損失は大きく、地道にわかりやすい説明をくり返していくことが境界を越えるために必要なことを痛感しました
- 説明不足、努力不足を毎回痛感。たえまぬ努力で失われた信頼を少しでも回復させたい。

今後に向けて

- ここまでの分析でも、お互いを尊重し、境界を低くするための仕掛けとしてのフォーラムには、一定の効果が認められる。
- どうしてその効果が導かれたのか等は、今後継続的に分析予定。
- 今後の日本のエネルギーを正面から考えるためにも、コミュニケーション不全と不信の悪循環に陥っている現状を打破したい。そのために、本研究から（テクニカルでなく）真っ当なヒントを得て、真っ当なシステムを構築していきたい。

- フォーラムのホームページ：
<http://www.ponpo.jp/forum/index.html>

- フォーラムに関するシンポジウム：
「原子力ムラ」の境界を越えるためにはどうしたら良いか？
2013年9月16日（月・祝）13:00～16:30
東京大学武田ホール（東京大学武田先端知ビル5階）

15

最後に、現在進めているここまでの分析でも、お互いに尊重して境界を低くするための仕組みとして、フォーラムは一定の効果があった。これを、今後の日本のエネルギーを正面から捉えるためにも、コミュニケーション不全の悪循環に陥っている現状を打破するヒントとし、真っ当なシステムを構築していきたい。

【質疑応答】

C.

原子力文化振興財団のレポートや原子力百科事典（ATOMICA）のサイトが分かりやすく参考になるかもしれない。

A. 木村

分かりやすく説明するのは非常に重要なこと。しかし、今は分かりやすく伝えても信頼されない可能性があり、これをとてども危惧している。わかりやすいコンテンツを届けるためにも、如何に不信の悪循環から抜け出し、コミュニケーションの俎上に乗せるかが、我々の一番の目的である。

Q.

専門家と一般市民を選んで議論する際、選択の仕方が難しいのではないかと思う。原子力発電所のような巨大なシステムの場合、安定性、機械的議論、地質学的事実、建築学的事実、エネルギーに関することまで、全てのことが含まれてくる。その基礎的なことをどのような基盤で議論するか。ただ議論するだけでは、時間の浪費にならないか。どういう方向性を求めているのか。全てこの方法で決めていくと、時間がかかり過ぎる。私の視点は原子力ムラの内側かもしれないが、どういう基準で、どう決めていくかという根本を決めなければいけないのでは。

A. 木村

どのように意思決定していくかは今後の課題ではある。とりあえず、意思決定が社会的に正当であるかどうか認識していただく。もしくはその仕組みをどうやって作っていくかが、実は心を砕くところだ。時間をかけてでもやっていかなければならない。我々はそのコミュニケーションの土壌を作ることを研究している。